86-42

文學士 坂本健一
文學士 江崎誠 合著

新撰歷史

東洋之部

東京書肆 合資會社 冨山房發兌

例言

此書は中等教育の教科用に編纂したるものにて、別ちて東洋、西洋の二部となす。

段落編章の別ち方は一に文部省所定の中學校歴史科教科細目に準據せり。

東洋史中西域以外の地名人名にして古くより漢字に譯して行はるゝものは、慣用の儘用ゐて改めず。

紀年は東西兩洋史對照の便によりてすべて西紀則基督紀元を用ゐたり。

地圖に大小二樣あり、閲讀の間直ちに當時の形勢を知らしむる必要より木板の小地圖は本文中に組入れ、また其詳を悉くさんが爲め卷末に別に大地圖を加へたり。

明治三十二年八月

著者識

新撰歷史　東洋之部目次

序論　一頁

第一編

第一章　太古の支那　唐虞三代　七

第二章　春秋の世　一二

第三章　周の制度文物　孔子　一七

第四章　戰國　二二

第五章　周末の學術　二六

第六章　太古の印度　二九

第七章　佛教の興起　三三

第二編

第一章　秦の一統　楚漢の爭　三八
第二章　漢の初世　四四
第三章　武帝・宣帝の業　四夷の服屬
王氏の簒
第四章　後漢の政　西域の叛服　四九
第五章　匈奴・鮮卑の盛衰　五八
第六章　三國　六三
第七章　晉　五胡十六國　六七
第八章　東方諸國の古史　七四（7.6.より9.6.迄）
第九章　大月氏及印度　佛教の東流　八二
第十章　宋・齊・梁・魏　八七
第十一章　陳・北齊・周・隋　柔然・突厥　九一
九六（9.5.より10.2.迄）

第三編

第一章　唐初の治　武・韋の禍　一〇三
第二章　開元の治　安・史の亂　一〇八
第三章　藩鎭・宦官の禍　唐末の大亂　一一三
第四章　東方諸國の盛衰　一一八（11.8.より12.4.迄）
第五章　西北諸國の盛衰　波斯　大食の興廢　一二二
第六章　漢唐の儒學　一二八
第七章　文藝　一三三
第八章　佛教・道教　一三六（13.6.より14.4.迄）
第九章　祆教・景教の東流　南海の貿易　一四〇
第十章　五代　宋の初世　一四四

第十一章　神宗の新法　哲宗の改復　徽宗の紹述　一五〇
第十二章　遼・金の興廢　一五四
第十三章　宋・金の交渉　一五七
第十四章　宋代の儒學・文藝　一六一
第十五章　宋代の高麗　一六四
第十六章　大食國の分裂　印度に於ける回教國　西遼の建國　一六七

第四編

第一章　蒙古の勃興　元太祖の西征　一七二
第二章　元太宗の南略　拔都の西征　一七七
第三章　元憲宗の南征　旭烈兀の西征　一八一
第四章　元世祖の一統及東侵　一八五
第五章　海都の興亡　元代の治亂　一九〇
欽察・察合台・伊兒汗三國の盛衰　一九四
第六章　明の初世　二〇〇
第七章　帖木兒大王の兼併　二〇四
第八章　明の中世　二〇八
第九章　交趾の叛服　沿海の寇盜　二一三
第十章　明の末世　二一七
第十一章　莫臥兒帝國の興亡　二一七
第十二章　葡萄牙・西班牙の東略　天主教の東流　二二一

第五編

第一章 清の開國 世祖の一統 二二六
第二章 清聖祖高宗の業 二二九
第三章 清人の學術 二三四
第四章 東洋に於ける和蘭英佛諸國の競爭 二三六
第五章 英領印度 二四〇
第六章 清英の交渉 二四五
第七章 長髮賊の亂 英佛の北清侵伐 二四八
第八章 露人の東略 清露の關係 二五三
第九章 安南暹羅 二五八
第十章 清佛の交渉 二六一
第十一章 清韓の關係 明治征清の役 二六三

目次終

新撰歷史 東洋之部

文學士 坂本健一
文學士 江崎誠 共著

序論

地理及人種

亞細亞大陸は天然の形勢によりて東・西・南・北及中央の五大部に分つ可く、其東方亞細亞と中央亞細亞とを分つ葱嶺一帶の山脈は實に大陸の脊梁にして其脈の横に走るものすべて四あり。阿爾泰山は最北に在りて北方及東方亞細亞の界を劃し、其南に天山ありて所謂天山南北兩路を分ち、更に南に崑崙山脈ありて西は興都克士となりて遠く高加索に連り東は圖伯特と天山南路とを阻て其末は南北の二

嶺及賀蘭・陰山の一派となりて支那及蒙古に入れり、最南の山脈は支那・圖伯特・印度の境界をなせる喜馬拉耶なり。

東洋史の本領

東洋史は主として南・喜馬拉耶、西葱嶺、北・金山の三山脈に圍繞されたる東方亞細亞に於ける邦國の興亡と、之と直間接に幾多の關係を有せる喜馬拉耶・興都克士兩山以南の前後兩印度・阿富汗・斯坦・卑路芝斯坦を含める南方亞細亞と、葱嶺以北南爾河に至る中央亞細亞とに於ける民族の盛衰とを併序するに在り。今地理上より東洋史の範圍内なる地方を區劃せんに、東方亞細亞に在りては黑龍江・烏蘇利江以南、興安嶺以東の滿州地方、其西に戈壁沙漠南北の内外蒙古地方更に西方に巴顏喀喇・祈連兩山間に在る青海地方、其西南に方り疊山重嶺の内に在る圖伯特、及青海・圖伯特の北なる天山兩路の地を掩ふ回疆を塞外として東方亞細亞文明の中心となれる支那本部あり、支那本部は北に黃河東流して河北・河南を別ち、南に楊子江横貫して江北・江南を別ち、西方に四川・雲南・貴州等別に山間の一區域を爲せり。支那の東北端には滿州の東南に高麗半島斗出して別に朝鮮の一區をなせるも其地の興廢はつねに滿州と相始終せり。支那の南は海に臨みて其西南に南海諸國あり、安南其最東に在りて安南の南に交趾支那・其西に暹羅あり、羅暹の北に老檜・其西北に緬甸ありて印度に連る。印度は北に喜馬拉耶の天險超ゆ難きあるを以て史上の變異は常に西北方・印度河の流域より起る。印度河以外は卑路芝斯坦・阿富汗斯坦にて中央亞細亞に連り。中央亞細亞は東葱嶺より天山兩路

を經て東方亞細亞に通じ、東・西・南三方の通衢に當るを以て、つねに其影響を受け、東移西竄幾民族の起仆興廢を見たりき。蓋し阿母河以西は却て歐洲の興亡に與り、阿爾泰嶮以北は風土上未だ人文の發達盛ならざりしゆゑ、共に東洋史中に入らざるなり。

上下數千歲の間、以上の地方に興亡起仆して幾多の邦國を爲したる民族は如何なる人種なりやといふに、波斯の伊蘭族、印度の亞利亞族等の如く歐羅阿非利加人種の頗る顯著なる事蹟を遺したるもあれど、大體上東洋史中の重要なる民族は皆亞細亞人種なり。亞細亞人種に支那人種、西伯利人種の二大別あり。支那人種中支那本部の漢族は數千年以前西方より黃河に沿うて其地に移住せしものにして

實に東洋史上に最大の事蹟を遺したるものなり。圖伯特族も支那人種にして氐・羌・月氏・吐蕃・西夏等の諸民族は皆此より起れり。支那人種中また印度支那族あり、漢族東下の前・江河の流域を左右せしも、後・漢族に逐はれて雲南・貴州・後印度方面に退移せり、古の所謂三苗・荊蠻・下りては南詔等は此族なり。次に西伯利人種は東方亞細亞の東北より北方に蔓延せる亞細亞人種にしてまた數族あり。中に就きて朝鮮の北より黑龍江附近にかけて通古斯族あり、漢代の東胡・六朝頃の鮮卑、唐初の靺鞨・唐末の契丹・宋代の女眞及現時の清朝も此種族に出づ。次に天山北路に蒙古族あり、元朝及印度の莫臥兒朝は共に此民族より興起したるなり。故に蒙古・通古斯二族は支那人種の漢族と合せて東洋史上の

三大族といふ可し。其他西伯利人種に屬するものには、天山南路より中央亞細亞にかけて土耳古族ありて匈奴・柔然・突厥・回紇等となり、高麗半島の南部より我邦にかけては日本族ありて日本及三韓諸國を起したりき。之を東洋史中の諸民族の概要となす。

三皇

黃帝

第一編

第一章　太古の支那　唐虞三代

支那は西南を喜馬拉耶、西を葱嶺、西北を阿爾泰の大山脈に限られて太平洋に面し、黃河・楊子江の灌流せる東亞細亞の大平原にして、今を距ること略五千餘年前に漢族・西北方より苗人種を逐ふて東に下り、黃河の沿岸に繁殖して幾多の部落を成せしも、各酋長ありて未だ一統の君主なし。傳說によれば諸酋の中、燧人氏は火食を傳へ、伏羲氏は佃漁を敎へ八卦を作り、神農氏は稼穡・交易の道を開きて最著はる。後世稱して三皇といふ。

三皇の後、有熊國（河南省）に黃帝出で、英資大略・干戈を執て四

五帝

唐虞の代

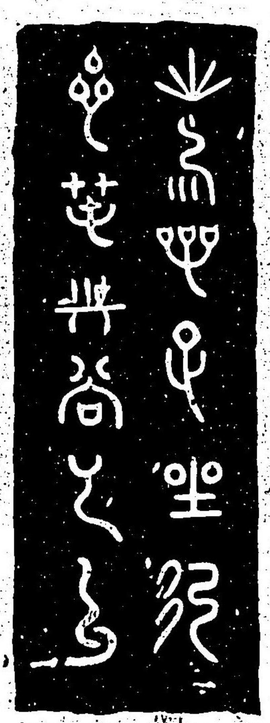
方を征し、東・海に抵り西・空桐（甘肅省）に達し南・楊子江を限り北・釜山（直隷省宣化府）に至る大帝國を建つ。宮室・舟車・文字・曆數より官職・衣冠の制に至るまで此時代に起るもの多し。是支那に於ける統一政治の濫觴なり。顓頊・帝嚳・帝堯・帝舜相次で君たり。所謂五帝是なり。

唐堯は嚳の子、平陽（山西省平陽府）に都す。洪水あり鯀をして之を治めしむ。虞舜を畎畝の中に擧げて位を禪らんとす。鯀諸侯の間に勢あり、共工・驩兜・三苗と結び堯に反す。舜堯を相け此四凶を除き蒲坂（山西省蒲州）に都し鯀の子禹を擧げて九州の水土を治めしめ、中央に司空・司徒以下の諸官を設け地方に四岳・十二牧を置き巡狩・朝貢の制を立つ、後世唐虞の聖治といふ。

夏

禹

禹・治水の功によりて舜の禪を受け安邑（山西省解州夏縣）に都し封國の名をとりて夏后氏と號す。禹嘗て備に艱苦を嘗めしを以て力めて民を休養せしかば、天下其德に服したりの死後子啓を立つ。王家の世襲此に始まる。啓の孫・相の世有窮（山東省濟南府）の后羿及其臣寒浞の亂あり。少康出でて夏祚を中興す。



夏禹

殷

後十一傳して履癸に至り、暴虐にして民心を失ひ湯の爲に滅さる。夏桀是なり。

帝舜の司徒契・商（陝西省商州）に封ぜらる。契の後湯大志あり。伊尹に任じて內・民心を收め外・諸侯を服し、遂に桀を南巢（南徽）

省・盧州に放ちて亳（河南省・歸德府）に都す。盤庚に至り王室の衰を回へし都を殷（河南省・河南府）に遷し國を殷と號す。十一傳して帝辛に至る、紂と號す、厚斂峻刑・淫虐を縱にし三仁（箕子・微子・比干）の諫を用ゐずして周の爲に亡ぼさる。湯より此に至り二十八世六百年なり。

周の盛世

帝舜の后稷棄の子孫・夏亂に遭ふて西戎の間に竄れ後・獯鬻を避けて岐山（陝西省・鳳翔府）の下に移り國を周と號す。昌に至りて殷の西伯たり、天下の諸侯多く之に歸服す。昌歿して子發・呂尚を用ゐ諸侯を會して紂を破り鎬京（陝西省・西安府）に都し、先王を追崇し昌を文王と號し宗族功臣を天下に分封し五等爵を立つ。武王是なり。武王崩じて成王幼し、周公旦政を攝すること七年、制度禮樂を定めて範を後世に垂れ文武二王と並稱せらる、召公奭亦よく輔翼の任を盡くし康王の世を終ふ。周室の盛此四王の世に極まる。康王の孫穆王は遠略を好み八駿に駕して天下を周遊し西の方犬戎を征して塞外に出づ、而も諸侯の心を失ひ周室漸く振はず。厲王暴虐にして國人に逐はれ、宰相共和の政を爲すこと十四年。其子宣王靜・玁狁・荆蠻・及淮徐の三夷を征し

中興の業を爲しゝも。幽王に至り褒姒を寵して犬戎に弑せられ、其子平王は戎狄の勢を避けて東洛邑（河南省河南府）に遷る。之を周の東遷といふ。武王以來是に至るまで凡そ二百八十年にして、諸侯強横・兼併を事とし、蠻夷跳梁・中國を侵食し、王室は徒に虛名を擁するも君主の實權既に莫し。

周室の東遷

第二章　春秋の世

「平王東遷の後・周室式微・天下に號令する能はず。諸侯の大にして力ある者・上・王室の衰を扶け下・諸侯の難を靖ぬ内・列國を糾合して外・戎狄を攘ひ尊王攘夷の義を提唱して雄威を天下に振ひ覇者と號す。覇は伯なり、諸侯の長をいふ。

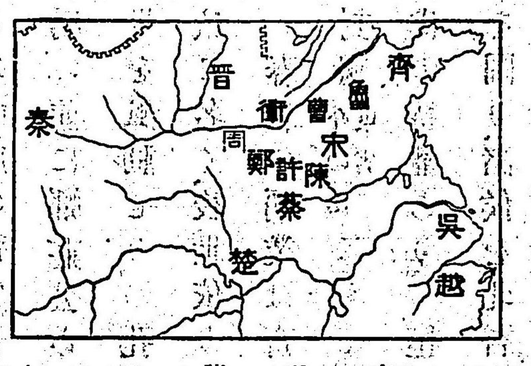
覇者

周の初・諸侯の數千八百と稱す、平王の時、其存するもの百六十、就中大なる者十又二、魯・衛・晉・鄭・曹・蔡・燕は周の同姓にして齊・宋・陳・楚・秦は周と姓を異にす。而して克く覇業を成せしものの中原の齊・宋・晉及西秦・南楚あり、稱して五覇といふ。五覇の前に鄭莊公あり五覇の後に吳闔閭・越句踐あり、亦皆一世を風動せり。孔子・魯に生れ此等覇者興亡の史を修め春秋と名く、後世依りて春秋の世といふ。

「春秋の覇業は齊の桓公に始まる、齊は周室の元勳・呂尚の封國（今の山東省）にして薄姑（山東省青州府）に治し、東海の重鎭にして征伐の特權あり。桓公・管仲を用ひ稅法・兵制を釐革して富强を圖り、諸侯を北杏（山東省泰安府）に會して宋の亂を平げ、柯（山東省克州府）に會して魯の侵地を返し、諸侯の信を得て始めて覇を稱す。時に山戎は齊・魯・燕を困しめ、北狄は殆衛を滅し邢を破る、桓

齊桓の覇業

公・戎狄を攘ふて・邊境を靖んず。楚は顓頊の後・熊繹始めて丹陽に封ぜられ、熊渠・王室の衰微に乘じ地を江漢の間に擴めて王號を僭し、武王・文王つぎ出でて淮南の諸國を併せ鄂（湖北刑州府）に都し、湖北に據りて北上し中國に逼まる。桓公之を召陵（河南省許州府）に屈し中國の諸侯少康を得たり。而も管仲死して齊漸く振はず、桓公沒して覇業遂に衰ふ。」



春秋諸侯

宋襄公代りて諸侯を統ぶ、楚之を泓（河南省歸德府）に破り勢に乘じて中國を併呑せんとす。晉は周の同姓にして絳（山西省平陽府）に都し獻公に及びて強大なり。公子重耳・驪姬の亂を避けて外に在ること十九

晉の文公と

年、秦の穆公の助を得て國に歸り、先世の餘威を以て齊衰へ宋敗るゝに乘じ中國の盟主となり、赤狄を攘ひて周室を安んじ、楚を城濮（山東省曹州府）に破りて其北上の勢を挫く、文公是なり。子孫善く其遺業を守り秦楚と鼎立して諸侯に覇たること殆ど二百年なり。」

「秦は嬴姓、幽王の爲に犬戎を攘ひて諸侯となり、周室東遷の後其故地を得初めて大なり。晉、文公の沒するや穆公・百里奚・蹇叔等を用ゐ、鄭を襲ひ滑を滅し、晉を破りて河西を得戎を攘ひて地を拓くこと千里、覇を西方に唱へて秦業の基を立つ。時に楚に莊王出でて庸を滅し宋を伐ち陸渾の戎を討ち、兵を洛上に觀て周室を蔑にし、鄭を圍みて晉師を邲（河南省開封府）に破り、威・中國を撼かし諸侯皆命に從ふ。共王康王其

秦の穆公

吳越の爭

業を繼ぎ昭王に至りて衰ふ。[illegible]

「吳の先は周、文王の伯父太伯に出づ。姑蘇（江蘇州府）に都す。[illegible]壽夢に至り國勢强大、晉と同盟して頻に楚を侵略せり。[illegible]闔閭國を承くるや楚、昭王の亡臣伍員の謀を用ゐ兵を發して郢を陷れ、東、痟廬を征し西、巴蜀に抵り、楚に代りて江淮の間を横行す。[illegible]吳の南に越あり。夏の少康の後にして會稽（浙江紹興府）に治し屢吳と爭ふ。[illegible]其君允常吳に敗れしが、子勾踐、吳王闔閭を破りて父の辱を雪ぎ王號を僭す。闔閭の子夫差、薪に臥し膽を嘗むること三年にして大に越を破り前敗に報ゆ。勾踐身を屈して吳に降り、范蠡文種の謀を用ゐ力を養ひ兵を練る。[illegible]夫差越に勝ちし勢に乘じ北の方中國に入り諸侯を黃池（河南省）に會す、勾踐其虛を襲ひ吳を滅ぼして其地を併せ、淮を渡りて諸侯を徐州に會し貢を周に致し中國の覇柄を秉る。實に周、元王の三年（西紀前四七三年）なり。」是より先數年魯、麟を獲て孔子、春秋の筆を斷つ。周室東遷以來是に至るまで十五主、凡二百有餘年なり。

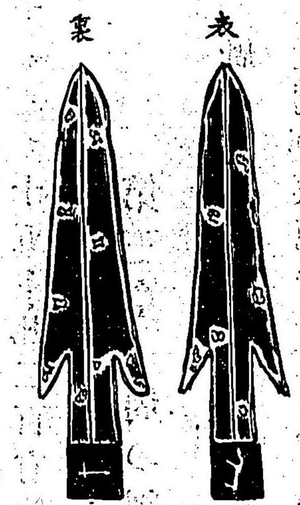
第三章　周の制度、文物、孔子

周の禮樂制度は夏、殷の制を折衷し周公の創意を加へ後世歷朝の模範となれり。

周の封建制

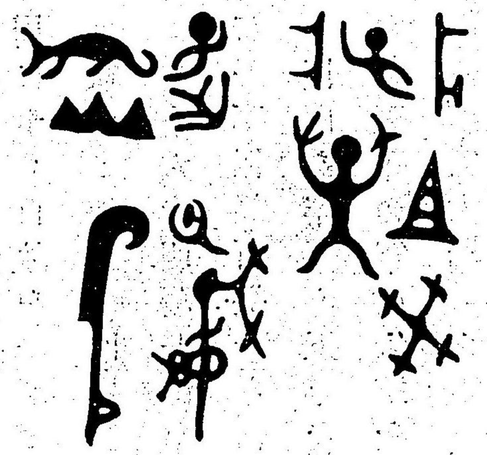
(一)封建　支那封建の制は夏、殷の際漸く備はり周に至りて公、侯、伯、子、男五等の爵を立つ、大國は方百里、公、侯を封じ、中國は方七十里、伯を封じ、小國は方五十里、子、男を封じ、五十里に滿たざるものは附庸とし、天下を九州に分ち王畿は千里、其中に居る。畿外は五國を屬とし、

二屬を連とし、三連を卒とし、七卒を州とし、伯・正・帥・長を置きて地方を制馭す。(二)官職　太師・太傅・太保の三公・少師・少傅・少保の三孤は天子の顧問にして、天・地・春・夏・秋・冬の六官は行政官なり。六官に長あり其屬各六十。天官は冢宰を長となし萬政を總べ、地官は大司徒を長となし教化を掌り、春官は大宗伯を長とし祭祀・禮樂を掌り、夏官は大司馬を長とし兵馬を掌り、秋官は大司寇を長とし刑辟を司り、冬官は大司空を長とし百工を掌る。(三)田制　夏の田制は毎戸田五十畝を授け中・五畝の所得を朝廷に納れしむ、貢法といふ。殷は井田法を用ゆ、一區七十畝の田・九區を一井となし八家に授け中・一區の利を稅す、助法といふ。周に至り百畝を一區とし戸口の疎密に依り貢法と通じ用ゆ、徹法と稱す。(四)兵制　周の王畿は方千里・山川邱宅を除きて略六十四萬井田を得、六十四井を甸とし萬甸あり。甸毎に一車・四馬・百兵士を徵發し、五人を伍となし五伍を兩となし四兩を卒とし五卒を旅とし五旅を師となし五師を軍となす、天子の軍は六軍・七萬五千人なり。其他・刑は上世既に墨・劓・剕・宮・大辟の五あり、周初に流・朴・徒・贖あり、後・夷族・車裂・體解の酷刑を生じたり。學は有爵者の子弟に禮樂詩書を授くる大學あり、又州に序・黨に庠・閭に塾ありて人民の子弟を教ゆ。抑、支那上古は象形文字を用ゆ、伏羲八卦を劃し蒼頡



支那古代兵器

文字を作り、周、宣王の時に及び史籀大篆を作り文字漸く進歩し、後、秦に至りて小篆・隷書を生ず。當時未だ筆紙なく竹木を編みて卷とし鐵筆を以て字を刻せり。書は三墳・五典・八索・九丘ありしも今存せず、尚書は唐虞三代の績を傳へ易は諸學の本たり、詩は歌謠を周禮・儀禮は禮法・制度を傳へ皆當時の文運を觀る可し。樂は黄帝の時伶倫十二律を作り周に至りては治國の要具となれり。



太古支那文字

然れども文物典章の盛美は虚禮・飾文に陷り、綱紀制度の廢弛は言論自由の道を開き天下亂れて治國濟民を説く者紛々として起る。就中・楚に李聃ありて老子五千言を著し禮制智巧の末を排し無爲道德の説を唱へ世を遯れて終る所を知らず。聃に少しく後れて魯に孔丘出づ。孔丘字は仲尼、周、靈王の二十一年(西紀前五五一年)を以て魯國に生れ列國を周遊して儒教を説き仁道を基礎として修身治國の術を唱ふ。然も其言・當世に納れられず、則退きて先王の禮樂を修め易・書を明にし詩謠を整へ春秋を作りて道を後世に垂る。七十三歲にして沒す。弟子三千人・身六藝に通ずる者七十餘人あり、身沒してなほ千歲の下に廟食し、其

老子

孔子

教は後世支那政教の基本となり、東洋道義の典範となれり。

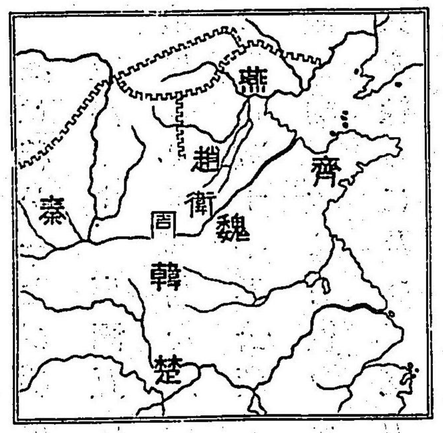
第四章　戰國

春秋の世、周室既に主權無きもなほ幾分王家の威を保ちしかば、五覇交、起ると雖も必ず尊王を口にして民心を攬れり。然れ共周の衰微年と共に甚しくして恢復の望莫く、諸侯の勢力日に強大にして一統の業を望み、覇者は遂に皆王

陪臣の簒立

戰國の七雄

號を僭して侵略兼併を事とし、復尊王を唱ふる者なし。而して列國の君主、會盟に忙しくして內顧の暇なきに乘じ重臣、內に事を用ゐ、私恩を賣りて民心を收め、使節に托して外援を結び、遂に簒立を圖るに至り、田氏は齊を簒ひ、韓・魏・趙は晉を三分す。周王制する能はず、却て認めて諸侯と爲す。於是田齊は東方に割據して山海の利を占め、三晉は中原に鼎立して地域になれ共に土肥に民衆し。楚其南に在りて國勢を挽回し、燕は東北一帶の地に據り南面して雄を爭ふ。而して秦西戎の地を拓き富力を積みて徐に東・中國に向ふ。天下の大勢は此



戰國の七雄

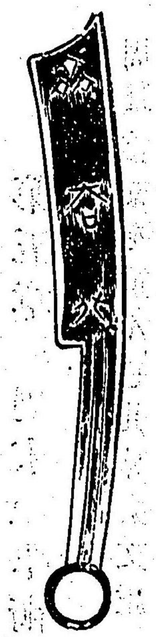
七雄の手に歸し、宋・魯・鄭・衞は周室と共に纔に餘喘を其間に保つのみ。滕・薛・曹・杞に至りては有れども殆ど無きが如し。此を戰國初期の列國の形勢となす。

秦の勃興

秦は穆公一たび霸を中原に爭ひしも、間もなく兵を斂めて復出せず。列國互に攻爭して國力を消耗せる間、嶮要の地に據りて人材を用ひ。靜かに內治に力め富强を圖ること二百數十年、孝公・商鞅に聽き、家に二男あれば賦を倍し、耕織を勵む者は力役を免じ爵位を以て軍功を奬め、財を增し兵を練るに及びて秦力頓に强大を致し殆ど天下を制するの勢あり。

合從

洛陽の人・蘇秦は辯客なり、秦に赴き惠文王に見ゆ六國併呑の策を獻じて納れられず、去りて燕王を見て六國合從の計を授く。當時六國の地・南北に縱列せり、從は縱なり、合從は六國の攻守同盟策を謂ふ。燕王之に聽きしかば蘇秦更に三晉・齊・楚の五王に說きて合從せしめ、自其長となりて六國の相を兼ね、周の顯王の郊迎を受くるに至れり。（西紀前三三三年）然れども秦は離間策を施



周代貨幣

連衡

して齊・魏先づ同盟を脫し、又楚・趙・魏・韓・燕の合從軍を破りて其威・諸侯の間に振ふ。魏・相張儀嘗て秦の客卿たり、是に於て合從の難を論じ連衡の利を說き、六國を降して西秦に服事せしむ。衡は橫なり、六國は東に在り秦は西に位するを以

て連衡といふ。秦因て復張儀を用ゐて相とす。(西紀前三一一年)後惠文王沒して儀秦を去り連衡亦敗れたりしも、天下これより遊士說客多く、公子大臣皆食客數千人を養ふて相誇り、列國の諸侯或は合從をなし或は連衡を試み一定の計なし。而して秦獨り着々として富强の策を講じ一統の計を回らしたり。

第五章　周末の學術

學術の勃興

周は禮樂を重んじ其弊繁文虛禮に馳せたれ共、造言律ありて異說を禁じたれば、春秋の際に至るまで新學の興るものなし。春秋の末戰國の初天下亂れて階級壞れ、道を信じ民を濟ふの士名を求め身を立つるの徒四方より起り、諸子百家各其說を述べ意見を鬪はし、諸道の學紛々として興り漢族の智力の發達是時代を以て最とす。

儒學

孔子魯に出で古典を修め仁道を說き、其孫子思中庸を作りて誠を說き、後孟軻出で孟子を著はし仁義を說き性善を唱ふ。後世孔孟二子を並稱して聖賢となす、孟軻に少しく後れて荀況ありて荀子を作り、禮義を尙び性惡を唱ふ。當時曲學阿世の徒多く孟荀二子の如く卓然獨行の風あるものは稀なり。北方の學徒多く孔子を祖述して儒學の一統を成す。

道家

老子楚に出で無爲恬淡の說を唱へてより、後百年にして列禦寇出で列子を著はし、列子の後莊周出で神絕の奇筆を以て莊子を著はし、共に老子を祖述す。南方の學者多く之

に唱和して道家の一流興る。後世の道教は之に附會假托して起れり。

楊・墨二家

儒・道二流の外に楊朱・墨翟・法・兵・名・縱横諸家の學説あり。楊朱は自愛快樂の説を主張し、墨翟は、之に反して兼愛節儉の説を吐きて墨子を著はす。二人の説一時を風靡せしかは孟子最力を其排擊に用ゐたりき。名に從ひて實を責め法・術の政治に必要なるを説くは法家の學にして、管仲・李悝其祖たり。申不害は專術を説き、商鞅は主として法を唱ふ、韓非出づるに及びて二者を合せ説けり。孫武と吳起とは孫子・吳子を著はす、共に兵術戰畧の書にして後世の兵家之を祖述す。名家には公孫龍・惠施の徒ありて堅白異同の詭辯を弄す、蓋今の論理家なり。彼蘇秦・張儀の諸侯に遊説して縱横の策を立つるや、公孫術・蘇代・蘇厲・周最・樓緩の輩出で之に倣ひ縱横家の名あり。文章詩賦に至りては楚に屈平あり、讒に遭ひて憂愁悲衷の餘離騷を作り後世の範たり。

印度

亞利亞人の南下

第六章　太古の印度

是より三頁、終迄必要無し

印度は喜馬拉耶・興都克士兩山脈を北境となして南太洋中に突出せる大半島にして、信度河其西北境を流る、故に古身毒といふ、後轉音して印度と呼べり。

今より大凡四千餘年前阿母・西爾兩河の間より亞利亞人種起りて東南に移り、信度河を越ゆて恒河に達し、先住の土人度羅毘陀人を驅逐征服して其地を占領せり。當時此の人民は幾種の部落に分れ、各其酋長の下に耕耘・攻守し、未だ

太古の印度

種姓職業の別もなかりしが、歳月の經過するまゝに人口增殖し土地廣まり、文化日に進み風氣月に開け、恒河流域に小邦國起るに及びては、人民の間に四種の階級を生じたり。

四姓の別

四種の姓は祭祀教法を掌る婆羅門、軍國の事を掌る刹帝利、工業・商賣に從事する吠舍、耕・牧其他の賤業に服する首陀にして、初の三姓は亞利亞なれ共最下級の首陀は亞利亞人に征服せられし舊土人なり。就中最勢力あるものは法權を有せる婆羅門にて宗教の盛なるに及びては兵馬の大權を世襲せる刹帝利種の如きも其壓倒するところとなりき。

四吠陀

印度に入りし亞利亞人種が太古より傳來せる經典に吠陀あり。吠陀は智識の義にして四種あり。神の賛辭を集めたる梨俱吠陀、歌詠を蒐めたる僕馬吠陀、凡ての儀式に用ゆる賛唱を載せたる耶柔縷吠陀、及祈禱避害等の唱辭を述べし阿他縷婆吠陀、是なり。

婆羅門教

祭祀・教學を掌れる婆羅門は深遠なる優波尼沙土によりて此四吠陀を研究し、宇宙の眞相、人生の目的を解釋せんと試み其且つ醫・數・天文・論理等の諸學を練習して國民中精神上の最優者たるを以て、摩奴の法典を規定し、自己の種姓を造化神たる梵天に附會し、他の三種姓にして反抗する者あれば峻刑・酷罰を加へて之を壓伏し、頗る專横を極めたり。彼等は吠陀の教を基礎として婆羅門教を創む。其教は神と萬有を一視し、萬有は萬有本體より出でゝ復其本體に歸べる者なりとし、靈魂不滅・輪廻の說を唱へ、懺悔・苦行によりて過去の罪惡を消滅し現世の繫縛を解脫し、速に本體に歸す可しといふ、則一の萬有神教なり

王族僧侶の爭

き。

而るに其教の盛なると共に之を掌れる婆羅門種の勢力益・增進し、遂に他の種姓と軋轢撞突せり。口碑に據れば倶利陀毗利王、一僧徒を愛して金穀を喜捨せしに、王死して其裔・金穀を要するとあり僧に行きて求む、僧・地下に藏して與へず、王族大に怒り僧族の斷滅を企て孕婦の腹を割くに至れり。又僧族中・波剌私剌麻あり學識ありて射に長じ勢の猛烈なる火焰の如しといふ。嘗て一王子が其父の家に來り悖戾の行ありしを怒り之を殺す、王子の子・彼の不在に乘じ其父を殺し讐を報ず、波剌私剌麻・憤懲措く能はず、一切の刹帝利を鏖殺せんと企て王族を亡ぼすこと二十一回、殘殺の血は五大流を成せりといふ。以て二族軋轢の結果・慘憺たる一大混戰を來たせしを見る可し。後・婆羅門の許可ありて刹帝利種族は再興せられしも、其勢力は尚微々たるものなりしに、大聖・釋迦牟尼の出世に及びて運命は一變せり。

釋迦牟尼

第七章　佛教の興起

支那に孔・老二子の出でゝ儒・道の說を立つるに當り、印度に大偉人ありて佛教を興す。其人・名を喬答摩悉達多（瞿曇財吉）といひ、刹帝利姓・釋迦種なるを以て釋迦牟尼と號す。牟尼は覺の義なり。西紀前五百五十八年を以て中天竺・北憍薩羅國・迦比羅城（黃城）に生る。父を首圖馱那（淨飯王又白淨王と云）といふ。夙に人間が生・老・病・死の四苦を脫離する能はざるを見て現世の無常を厭ひ、帝王の富貴と妻子の恩愛とを捨て、二十九

佛教

歳にして宮城を逃れ山谷の間に隠れ、難行・苦學・六年にして、正覺を得て山を出で、新教を説く。其教は吠陀を排し婆羅門に反し、種姓の差別を打破して一切衆生の平等を唱へ能く迷想を拂ひて繫縛を脱離せば、何人も等しく無限の幸を未來に享く可しと主張す。

佛陀

布教濟度に從事すること前後四十餘年にして入寂す。

時に西紀前四百七十八年周敬王四十一年皇紀百八十二年なり。其高弟摩訶迦葉・則・佛弟子五百人を王舍城に會し第一回の結集を爲し、後・邪舍陀・亦佛徒七百人を毘舍離に集め第二回の結果を催し、婆羅門の爲に屈辱され居たる諸姓の徒は皆新宗教に歸依して佛教は年と共に擴張せしも、釋迦滅後二百年間は其勢力・尚・恒河流域の外に出でざりき。

波斯王の侵入

是より先・西方亞細亞にはアッシリア亡びてキルスなる者波斯國を立つ。キルスの孫・ダリウス祖業を繼ぎ四方を征し、西紀前五百十八年東の方・印度に侵入し信度河の流域を

亞歴山大王の侵入

略して去る。則釋迦在世の時に當れり。後二百年を經て希臘のマケドニア王亞歴山・波斯を滅ぼし、ダリウスの舊圖を繼ぎて兵を印度に用ゐ、咀叉始羅に入りて西印度の諸侯を降し、北印度のポールス王を破り、更に進んで中印度に入らんとす。諸軍・炎暑に苦みて歸らんことを思ふ。王・則師を班し西紀前三百二十三年を以て巴比倫に沒す。

旃陀羅笈多

亞歴山の侵入により印度全國の騒擾せる際、首陀姓・旃陀

阿輸迦王の崇佛

羅笈多出でゝ中印度の摩竭陀國を纂ひて毛利耶王朝を創む。時に亞歴山の將セレウクス西方亞細亞に條支國シリア國を建て兵を率ゐて印度を征す。笈多・邀へ戰ひしが遂に和を講じ其女を納れて后とし、信度河以東の地を得、中・北・西・三印度を掩有し、六十萬の雄兵を蓄へて威を四方に布く。笈多の孫阿輸迦王阿育王位に昇るや、深く佛法に歸依して國教となし、千僧を華子城パトナに會して第二回の結集を催し、佛教の主義を確定し、教法大臣を設け、布教僧を四方に派遣す。阿輸迦王崩じて後幾ならずして毛利耶朝は亡びしも、相次で起れるサンガ・カーンヴァ兩朝共によく佛教を保護せり。後來佛教の西は大夏バクトリアより東は馬來半島の諸國に及び南・海を越ゐて獅子國錫蘭に弘通流布するに至りしは主として阿輸迦が力によれりと謂ふ可し。

第二編

第一章　秦の一統　楚漢の爭

六國の爭

支那は蘇秦・張儀列國の間に縱横策を劃してより後・殆百年間・六國は合從・連衡の間に反覆して徒に國力を消耗して尙相和せず、齊・魏は趙を襲ひ、楚は晉を攻め、齊湣王は宋を滅し燕を破る。燕は樂毅を用ゐて齊の七十餘城を降せしかば、齊は田單を將として其侵地を復す、而して皆・强秦の後に覗ふを思はず。孟子は齊に用ゐられず、吳起は魏に、疑はれ樂毅は燕に罷められ、廉頗は趙に容れられず、屈平は汨羅に投じ、韓非は韓を去り、六國の賢良皆志を得ざるに當り、秦はよく范睢の遠交近攻策を用ゐ、又李斯が反間の計を行ひ惠

秦の一統

王は・司馬錯を遣して巴蜀を收め、武王は・甘茂をして韓を取らしめ、昭王に至りて白起を將として三晉を攻め、郢を拔きて趙軍四十萬を長平（山西省澤州府）に坑にす。時に周室・東西に分れしが、西紀前二百五十六年西周、赧王は秦の勢に恐れて地を獻して降り、後・七年にして東周、惠公も亦秦に降り、周遂に滅ぶ。武王より是に至るまで惠公を殺せて三十八世・八百七十四年なり。此年・楚・魯を亡ぼす。後・十九年にして韓・先づ亡び、又二年にして趙亡び、更に三年を經て魏亡び、楚は魏に後るゝこと二年にして亡び、翌年・燕亡び、其翌年・齊亡び、衛君獨存せしが秦二世皇帝に廢せられて封建の諸侯迹をとゞめず、天下を擧げて秦の郡縣となれり。

「秦王、嬴政・父祖の餘烈によりて六國を平らげ、功・三皇・五帝

を兼ねて百王の始祖たるべしとて自始皇帝と號し咸陽（陝西府）に都す。始皇周末諸侯の弊亂に懲り、李斯の言を納れて郡縣の制を布き、天下を三十六郡に分ち、守・尉・監を置きて之を治めしめ、賦稅を割きて諸子功臣に支給し、朝廷の大政を丞相に、兵政を太尉に掌らしめ、御史大夫をして之を監察せしめ以て臣下の權を分ち。民間の兵器を收めて禍亂を防き天下の富豪を聚めて咸陽を富ましめ。中央君王の權を重くして、地方臣民の力を弱めたり。次で盛に土木を起し、渭水の南に阿房宮を作り、諸郡に離宮を建つること七

秦の泰山の碑

百、屢地方を巡行して封禪を行ふ。帝は又北の方蒙恬に兵三十萬を授けて匈奴を陰山の陰に退け、長城を增築して臨洮（甘肅省臨洮府）より遼東に抵り以て之に備へしめ、南の方百越を征して新に南海・桂林・象郡の三郡（兩廣・安南の地）を置き兵五十萬を發して南嶺に屯せしむ。是に於て秦の疆域の大殆ど周に倍せり。

六國は亡びたれ共學術は滅せず。天下の儒者皆新政を是非し人心を動かす。始皇是に於て挾書禁を發し詩書を燔き儒生を坑にす。而も大役頻りに起りて庶民奔命に勞れ、封建破れて遺臣亂を思ふ。故に西紀前二百十年始皇帝崩じて二世皇帝の立つや陳勝・吳廣は蘄（安徽省鳳陽府）に起り、楚の舊臣項籍は叔父項梁と吳（江蘇州）に起り范增の計を用ゐて懷

王を立つ。秦章邯を遣りて頻に三晉の賊を破り進で項梁を斬りしも、籍の爲に破られて關東また秦兵なし。劉邦沛（江蘇徐州府）より起り籍に應じ嶢關（陝西省西安府）を破りて霸上に至る、是より先秦には趙高權を專にし帝二世を弑す。公子嬰高を誅して立つ。時に劉邦の兵既に至りしかば王嬰素車白馬面縛して邦が軍門に降る。始皇帝と稱してより此に至り三世十五年にして秦亡ぶ。

楚漢の爭

項籍字は羽、勇武絶倫にして楚の名門たり。秦王已に劉邦に降りしかば籍其功を嫉み范增の言を納れて之を鴻門（陝西省西安府）に殺さんとして果さず。よりて邦を巴蜀漢中の三郡に封じ、關中の地を擧げて秦の降將に與へ邦が中原に出づるの道を絶たしめ、懷王を義帝となして江南に移し、自彭城（江蘇省徐州府）に據りて西楚霸王と號す。時に田榮陳餘賞なきを憤り自立して王と稱し東北大に擾る。籍親ら之を伐つ。邦其虛に乘じて關中を襲ひ、進んで黃河の南北を定め、洛陽に入り、籍が義帝を弑したるを聞き、天下に檄して其罪を鳴らし、諸王の衆五十六万を率ゐて彭城に入る。籍三万の精兵を提げ急に還りて邦の軍を破り諸王を降して西上す。邦之を滎陽（河南省開封府）成皐（仝上）の間に扼し、別に韓信をして河北を徇へ、背後より籍の糧道を絶たしむ。籍の勢振はず。則邦と和し天下を兩分し鴻溝（汴河）以東を楚とし以西を

高祖

漢

漢となす。張良・陳平等邦に勸め約を破りて籍を追はしむ。邦其言に從ひ楚軍を追躡して籍を垓下（安徽州鳳陽府）に圍む、籍圍を潰して走り烏江（安徽省和州城）に自刎す。劉邦籍を破りて天下を定め皇帝の位に即き秦の遺業を承けて西・長安に都す。西漢の高祖皇帝即是也。」

第二章　漢の初世

高祖の政策

高祖・微賤より起りて天下を定めしかば、大臣・諸侯多くは匹夫より出でゝ典禮に嫻はず。博士叔孫通・帝に勸めて朝儀を定め次で官制・法制を定む。皆・秦の舊制に則る。而も秦の滅亡に鑑み、郡縣を廢して封建の制を復興し、諸功臣を封じたりしが、功臣は大概天下豪傑の士にして、漢楚の爭衝

宗室の分封

に乘じ重賞を得んが爲に集りたるを以て、今や漸く强横ならんとす。高祖恐れて竊に之に備へ、韓信・彭越・黥布の如きは皆誅除して悉く其地を收め以て宗室の子弟を分封す、故に帝の末年・同姓の王たるものすべて九國あり。皆各官を置きて帝室の制度に模し、富强・殆ど漢廷と相匹敵し、朝家の所領は僅に十五郡に過ぎずして其租稅は三分の一を出でず。本末・內外の勢を失して尾大掉はず、遂に七國の亂因となれり。帝は又嘗て匈奴を征して冒頓に苦しめられしより、懷柔和親

漢初封建

の策をとり公主を尚し幣物を贈りて其歡心を求め、對外策一變せり。

呂氏の亂

高祖の后呂氏は創業の際帝と艱苦を共にせしかば政治に參して諸王・諸臣の爲に憚らる。高祖崩じて惠帝立つ。呂氏の出なり。呂氏乃帝の多病にして事を見ざるに乘じて大權を握り、帝の崩するに及びて遂に制を稱し、諸呂を用ゐて劉氏を壓倒し、漢の天下は殆ど呂家の手に落ちんとす。然れ共幾もなくして呂后薨じ、劉氏の諸王・朝廷の大臣と謀り諸呂を誅鋤して呂氏の難を絶ち、帝の弟代王恒を立つ之を文帝となす。

文帝の治

文帝初地方に在りて深く民情に通ず。故に帝位に即くに及びて、儉仁質素を以て天下に臨み、肉刑を除き田租を免じ、振窮養老の禮を定め、國用充實す。後世其治を稱して秦漢以後第一と爲す。然れ共初より形勝に據り雄兵を蓄へたる諸侯王は、文帝が代王より入つて大統を承けしと其寛厚仁恕なるとを見て、益驕りて帝室を重んぜず。濟北・淮南の諸王反を圖り、吳・楚・齊の諸王皆驕恣なり。賈誼其憂を看破し、治安策一編を上りて諸王抑損の急を說く。文帝より推恩令を下し、齊王襄の薨するに及び其封地を分ちて齊・齊北・濟南・菑川・膠東・膠西の六國となし其勢を割く、而も吳・楚二國は尚大封を擁せり。

七國の亂

文帝崩じて景帝卽位するや、晁錯・御史大夫となりて削藩の說を勸め、趙・楚・膠西の諸王過罪ある毎に其地を削られ皆朝廷を怨む。吳の地を削るに及び吳王遂に反し楚・趙・膠西・膠東・菑川・濟南の六國之に應じ、晁錯

漢の初世

漢代兵士

を除くを以て名となし、北は匈奴と連り南は東甌と結び竊に齊・濟北等と通ず。吳楚七國の亂といふは是なり。帝・晁錯を斬りて吳楚に謝せしも反王服せず、よりて周亞父を大尉に拜し三十六將軍を率ゐて之れを討たしむ、亞父・洛陽に至りて諸王の軍を破り、悉く諸叛を平らぐ時に西紀前百五十四年（景帝四年）なり。帝・是より諸侯王を京師に留

め、封國の租稅に衣食せしめて自・國に就くを許さず。朝廷より國相を命じて國政を執らしむ。故に封建の名ありて實は郡縣の治に近し。吳楚の亂已に平ぎてより四海・事無く國家益殷富にして府庫充溢し、太倉の粟・紅腐して食ふ可からざるに至りしといふ。

第三章　武帝・宣帝の業、四夷の服屬、王氏の簒

「武帝・雄才大畧を以て文景二帝治平の後を受け、內・文績を積みて泰平を飾り外・武勳を立てゝ國威を輝かしたり。初・高祖・叔孫通を用ゐ惠帝・挾書律を除き、文・景二帝の世に及び學術漸く興りしも主として黃・老・申・韓の雜學異說なりき。

武帝の失政

武帝位に即き、始めて年號を立て（武帝建元元年皇紀五百二十一年西紀前百四十年）詔して賢良の士を求め、諸子百家の說を却けて儒學を表章し、大學を設け五經（易、詩、書、禮、春秋）博士を置く。後世支那の學を說く者皆範を孔子に取るは此に因れり。帝又文辭詩賦を好み多く騷人詞客を招集せり。淮南王安は學者を四方に求め、河間王德は先秦の遺書を探る。於是公孫弘・董仲舒・司馬遷・司馬相如・孔安國・東方朔・朱買臣・兒寬・牧皐等の學者文人輩出して漢室の文運其極度に達せり。武帝は又名將を用ゐて地を四方に拓き蠻夷外國に通じ外征の武勳文績に超ゆ版圖の大漢初に倍せり。

然るに帝は又方術を好み方士に爵を授けて神仙を求めしめ、大に苑囿・池沼を設け、盛に樓臺宮觀を起し、屢巡狩封禪を行ひ、國用多くして前世の蓄積を蕩盡す。乃孔僅・桑弘羊等を擢用して新法を作りて財源を求め、賣官・購罪を許し、鹽鐵酒酤を榷し、緡錢舟車に稅し、白鹿皮幣を發して錢貨に代へ、均輸平準法を以て商賈の利を奪ふ。民法を犯す者多く、從つて酷吏を任じ法を以て之を繩す。於是東方に群盜起り長安に巫蠱の亂あり、天下騷然として漢室危く將に秦の覆轍を踏まんとす。

輪臺の詔

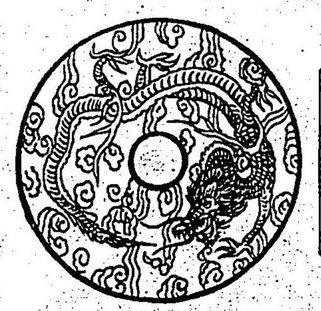
漢武帝

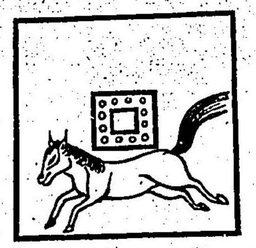
幸にして輪臺の一詔ありて、帝往事を悔恨し苛政を除きしを以て、海內幸に事なきを得たり。

宣帝の内治

西紀前八十三年武帝崩じて昭帝嗣ぎ、霍光政柄を執る。

「昭帝崩じて嗣無し。光・武帝の曾孫病已を迎立す、宣帝是なり。宣帝久しく民間に在りて下情に通ずるを以て專意を地方の政治に用ゐ、賢相・名吏相踵で出で上下互に勵精扶掖し内治の盛前後無比なり。帝又・武帝の後圖を承けて邊防を修め、匈奴を破り西域を服す。漢室の隆盛は武帝・宣帝の世に極まりて是より漸く衰運に赴けり。」





武帝の三幣

東方の服屬

南方の降服

殷の亡ぶるや箕子・遼河を渡りて朝鮮に王たり。肅愼・其北に居り韓族東南に在り。燕の滅ぶるや衛滿・其地に奔り箕氏に代りて王となり勢・四隣に振ふ、其孫衛右渠・父祖の遺烈を負ふて漢に服せず。武帝・楊僕を遣して之を平げ、眞蕃・樂浪・玄菟・臨屯の四郡を置き、三韓と境を接す。我九州の諸酋因て韓地を經て漢に私貢し其印綬を受くる者あり。南方は秦の南海郡・尉趙陀・漢楚の亂に乘じ桂林・象郡を併せて南越王となり、後漢冊を受く。其北に閩越（福建の地）・閩越の北に東甌（浙江の地）あり。七國の亂に吳王濞・東甌に殺されしかば濞の子・閩越の兵を假りて東甌を破り父の讎を報ず。閩越・勢に乘じ南越を伐つ。武帝・南越を救ひ閩越を定め、東甌の故地に東越王を封ず。後・南越亂れて漢使を殺し東越王も亦

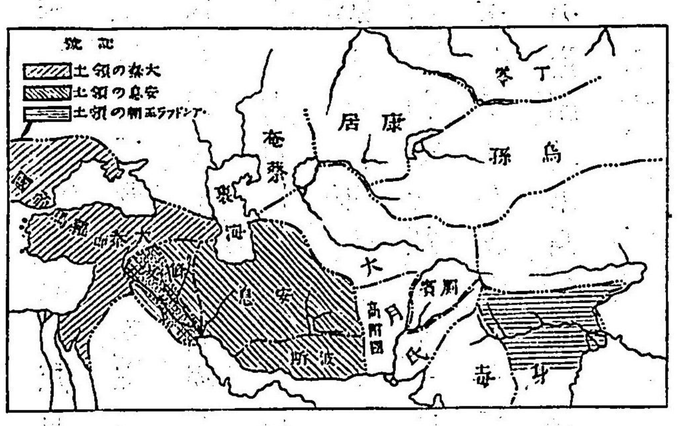
西南諸國の歸伏

之に與かる。武帝悉く討ちて之を平らぐ。

秦亡びてより支那の西南部は化外の舊に復せしが、武帝の時、唐蒙・夜郎國（蜀の南）に通じ、張騫・夜郎を經て身毒（印度）に通せんとして果さず、滇國（雲南）に達す。武帝・南越を降すの餘威を驅りて遂に卭（四川省寧遠府）筰（四川省雅州府）冉駹（四川省茂州府）の諸蕃を降せり。

匈奴

「匈奴は高祖以後益强大にして、冒頓の後老上出で月氏の地を奪ひ東・朝鮮より西・圖伯（ナベット）特に至る。武帝・衛青・霍去病・李廣利等をして之を征せしめ狼居・胥山を越えて瀚海に及び、河南の地を取りて五原・朔方の二郡を立て、兵を隴西に出して天山に達し匈奴と天山南路との間を絶ち、河西を定めて武威・張掖・酒泉・敦煌の四郡を置き屯田の兵を配す、匈奴復漠



漢代西域諸國

南に出る能はず。宣帝も亦烏孫（伊黎地方）を助け五將軍を出して大に匈奴を破る。匈奴は北・丁零に侵され東・烏桓に迫られ今又此兩敵あり。加之五單于内に爭ひしかば國勢日に衰ふ。元帝の世、匈奴の呼韓邪單于來降し、漢の力を假りて其故地を復し、入朝して恩を謝し婚を乞ふて漢の甥となる。是より後匈奴復た寇せず。

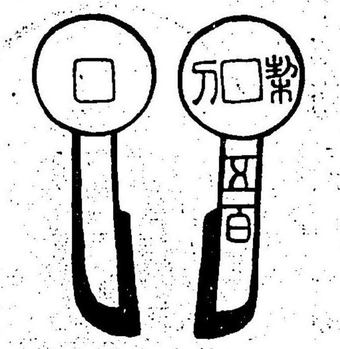
西域は條支國（シリア王國）既に衰へ、嬀水（阿母河）の畔に大夏（バクトリア國）

起り、バルチア亦獨立して安息國を立て、大夏を破りて國威頓に揚る。秦・漢の際月氏・河西（甘肅）の地を掩有せしが、冒頓に逐はれて西に奔り、更に烏孫に逼られて嬀水に移り、大夏の地を奪ふて大月氏國を立つ。大月氏の北に大宛（フェルガナ地方）あり。大月氏の東南に罽賓（カブール）あり。大宛の北は康居（キルギス）荒原にして、東は烏孫に接し以て匈奴所屬の小國に接す。武帝の匈奴を征するや、張騫を月氏に使して挾擊を謀る。騫至りて功を成さずして歸りしも、匈奴北に遁れて西域來往の道開け、東西交通の緒を得たるは武帝の功に歸せさる可からず。

「武帝内宴に耽りしより宦官事に預り元帝多病にして宦者威福を弄びしが成帝立ちて外戚王氏宦官に代りて權を

王氏の篡立

擅にし子弟皆顯要に當る。其族王莽奇才ありて大望を懷き恭謙士に下り名聲を博して成帝の大司馬となる。哀帝を經て平帝に及び莽の女皇后たり。莽よりて事を用る新政を布きて民心を收む。天下頌德書を上るもの四十八万人の多きに至る。莽遂に帝を弑して孺子嬰を立て、政を攝すること三年にして、漢室を簒ひ國號を新と稱し、制度を革めて悉く周制に據る。然も政令繁鎖にして法禁嚴密に過ぎ州縣其煩に耐へず民重斂に苦しみ、海内亂れて豪傑競起り赤眉の兵は山東を横行し綠林の賊は湖北を蹂躪せり。」



王莽刀泉

第四章　後漢の政　西域の叛服

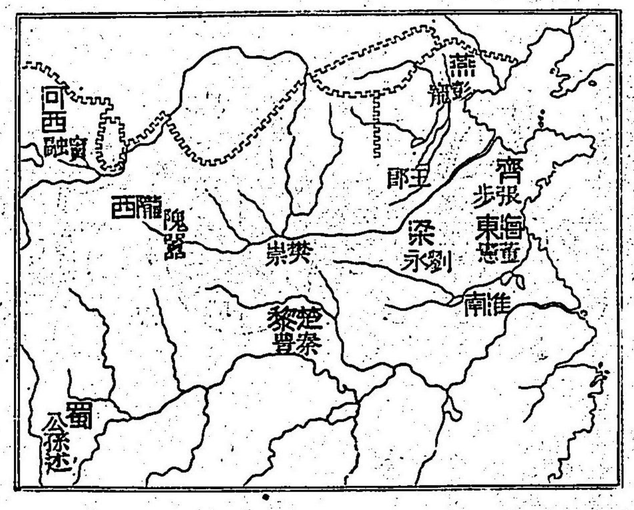
後漢の初世

「王莽漢室を簒ひて天下亂るや景帝六世の孫劉秀兵を春陵（湖北省襄陽府）に擧げ劉玄を擁して帝となし、長安を陷れて王莽を斬る。玄秀の兄縯を殺す。秀河北に銅馬賊及王郎を平げ玄を怨みてかへらず。遇赤眉長安を陷れて玄を降す。秀遂に西紀前二十五年を以て部南（直隷省趙州府）に即位し尋で洛陽に都す。是を東漢の光武帝となす。時に長安に赤眉あり、成都（四川省成都）に公孫述あり、成紀（甘肅省秦州府）に隗囂あり、河西に竇融あり、鄂爾多斯（オルドス）河南に盧芳あり、皆自立して漢命を奉ぜず。帝討ちて悉く之を平らげ

後漢（光武帝）

天下を統一し西漢諂諛の風を矯めて名節を勵まし、經術を修め禮樂を尚び、專意を內治に用ゆ。」明帝其遺緒を紹ぎ學を尚び政を力め、吏民其處を得て戶口滋殖す。明帝崩じて章帝承け、寬厚を以て天下に臨み、三世六十餘年泰平の治を成せり。「然るに和帝十歲にして大統を繼ぎ竇太后政を聽き竇氏の一族外戚の威を負ふて政權を擅にし逆謀を企つるに至りて、宦官鄭衆竇氏の黨を黜

外戚宦官の爭權



後漢の初に於ける群雄

黨錮の變

け功を以て大長秋となり遂に俺等(兄)弄權の端を啓く。安帝少帝並に幼にして帝位につき、外戚宦官相凌轢す。順帝の皇后の兄梁冀復外戚を以て威福を專にし、質帝を毒殺して桓帝を立つ。帝宦者單超と謀りて梁氏を除く。宦官乃外戚に代りて威を漢延に專にす。時に野に名節氣慨の士衆く、宦官の跋扈に憤慨して大學の諸生と結托

班超の西征

し、盛に國政を誹議し朝官を褒貶し、以て反抗を企つ。宦官之を目して黨人となし、帝に誣告して悉く之を禁錮す。東漢黨錮の變是なり。桓帝崩じ靈帝立つに及び、大將軍竇武・名士陳蕃等と宦官を誅せんとして謀漏る。宦官大逆を以て之を誣ひ、蕃以下百餘人を殺し、己と合はざる者は皆廢徙禁錮して益勢威を振へり。」

「後漢の西域征討は班超の功なり。初光武の世西域諸國の內屬を請ふを許さず。明帝匈奴を破りて武帝の舊圖に倣ひ假司馬班超を西域に遣はす。超先づ南山に沿ふて鄯善國(西漢の樓蘭國)に至り、北匈奴の使を斬りて國王を威服し、勢に乘じて于闐(和闐)疏勒(喀什噶爾)を降す。漢乃西域都護を置きて諸國を監せしむ。明帝崩じて諸國復反し都護府を陷る。漢

意を西域に絶つ。超・上書して征討を請ひ、莎車（葉爾羌）を略し龜茲（庫車）を降し、焉耆（喀喇沙爾）を襲ひ烏孫を招き、大月氏を破りて、西域五十餘國の都護となり、部將甘英をして安息を經て太秦に通せしめ、身・西域に在ること三十一年、威・葱嶺の東西に振ふ。太秦は邏馬なり。英・波斯灣頭に至りしも渡ること能はずして歸れり。西紀百二年（和帝永元十四年）班超沒して任尚代り、邊和を失して西域諸國皆漢に叛きぬ。然も是よりして支那は繒綵の産地として歐洲に知られ、太秦の安息を取るや其王安敦（アントニウス）の使者印度洋に游び安南を經て漢に通ず（桓帝の世後）。三國の時・太秦の商賈秦論・交趾（東京地方）に來り、支那の商船も亦錫蘭附近に游び、漢も亦新路を南嶺に通じ彼此の來往交貿の盛を致せり。

匈奴の勃興

第五章　匈奴・鮮卑の盛衰

匈奴は古・獯鬻と稱し後・玁狁といひ秦・漢以後匈奴といふ。水草を逐ひて蒙古地方に轉住し、勇健にして騎射を善くす。周の季世・列國の亂に乘じて中國に入る。趙・燕之を攘ひて長城を築き、秦に至りて其河南の地を收め悉く之を塞外に逐ふ。漢・楚天下を爭ふの際・匈奴に單于冒頓出で、東胡を討ち月氏を走らし、河南を併せ燕・代を侵して陝西に及び、其左賢王は東・上谷（直隸省宣化府）に居り、右賢王は西・上郡（陝西省延安府）に居り、單于は代（直隸省宣化府）雲中（內蒙古歸化城西）に居る。高祖・北征して白登城（山西省大同府）に圍まれ單于の妻に賂ひて辛じて免がれ歲幣を厚くし、公主を尙して其歡心を買ふ。匈奴乃ち漢朝を輕侮し

屢邊境を擾る。冒頓の子老上（名は稽粥）立ちて月氏の地を奪ひて天山南北兩路の地を服し強大を極む。

匈奴の衰微

老上の子軍臣單于の世、漢に武帝出でて頻に匈奴を征し、休屠（甘肅省涼州府）昆邪（甘肅省甘州府）を降し烏孫と婚を通じ、西域諸國を威服して天山南路の地を奪ふ。匈奴の威漸く衰ふ。軍臣の後七傳して壺衍鞮單于に至り、烏孫の漢に通ずるを怒り連りに之を攻めて多く人馬を失ふ。諸族四方より起りて其衰弊に乘ずるもの北に匈奴の別種丁零あり、東に東胡の一部烏桓あり、西に烏孫あり。加ふるに內訌起りて匈奴の西方諸國を統領せし日逐王は其地を以て漢に降り、東部の呼韓邪單于は兄郅支單于と爭ひ敗れて亦漢に降る。郅支西の方亞爾泰地方に走り康居王に依り、屢烏孫・大宛を侵して勢復昌なりしが、漢西域都護甘延壽の爲に襲殺せらる。（漢元帝建昭三年皇紀六百廿五年西紀前三十六年）匈奴是より遂に微なり。

匈奴の分裂

漢末・王氏の簒奪ありて支那再亂るゝや匈奴其機に乘じて復起り烏桓・鮮卑を連らね西域諸國と結びて連に山西・陝西地方を刼かす。曾、日逐王比・蒲奴單于と合はず、南匈奴に據りて漢に內附し、河南に居りて北匈奴と相攻伐す。明帝の初年、北匈奴屢邊塞に侵寇せしかば帝、祭彤・竇固等に命じ、南匈奴の衆を合せ大舉して北征し、伊吾盧（哈密）を取り、班超西域を服從して匈奴の右擘を斷つ。丁零・鮮卑・南匈奴及西域諸國四周より起りて北匈奴の衰亂に乘ず。

匈奴の西竄

次で和帝の外戚竇憲も大軍を以て北伐し燕然山（外蒙古杭愛山）に及び大に匈奴を擊破す。單于困頓して餘衆と共に遠く西方に遁竄し其

烏桓

鮮卑

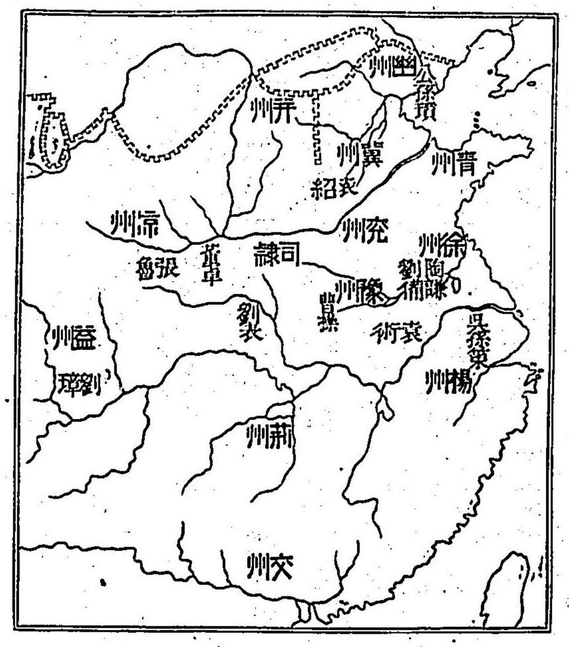
地遂に空し。鮮卑・其後に興る。

秦・漢の際・東胡の勢能く匈奴と對抗せしが冒頓に擊破せられ東方に奔り烏桓・鮮卑の二山を保ちて二族にわかる。烏桓は西漢の武帝に破られて漢に內屬せしが、東漢の獻帝の世・蹋頓(タフトン)出で、袁紹を助け曹操の爲に滅ぼさる。鮮卑は東漢の初、匈奴南北分爭の機に乘じて連に北に匈奴の地を侵略して漸く强大となり、桓帝の時に及び其大人檀石槐內蒙古の彈汗山に據りて、東は扶餘を卻け西は烏孫を擊ち北は丁零を防ぎ、盡く匈奴の故地を奄有し其土東西四千里・南北七千里に亙れり。石槐の死後四十年にして其部酋に慕護跋出で、公孫淵を滅すの功によりて魏より王に封ぜられ遼西に居る。慕容氏是なり。

漢末群雄の割據

第六章　三國

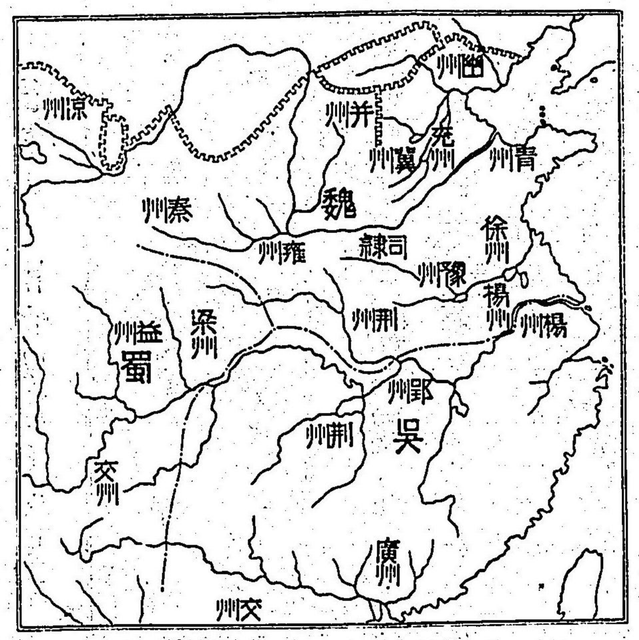
後漢の末宦官跋扈して皇室の威令行はれず叛亂四方に起る。就中・鉅鹿(直隸省)の張角・黃巾の妖賊數十萬を以て起り天下響應す。皇甫嵩討ちて之を平げしも其餘衆四方に散じて州郡を擾る。朝廷よりて重臣を州牧に任じ外權漸く重し。靈帝崩じて子辯立ち袁紹悉く宦官を誅滅す。



漢末群雄割據

董卓河東（山西省西南部）の兵を率ゐて京に入り帝辯を廢して獻帝を立つ。

紹・關東に奔り其諸將を連ねて卓を伐つ、卓・帝を奉じて長安に遷り王允の徒に弑さる。是に於て洛陽・主なきを以て關左の諸將・兼併を力め、曹操は山東に據り、袁紹は山西を有し、其從弟術は河南を略し、湖北に劉表あり、湖南に孫堅あり、公孫瓚は直隸一帶の地を有し、公孫度は遼東に雄視す。卓殺されて獻帝長安を逃る。曹



操之を許（河南省開封府）に迎へ、天子を挾んで四方に臨み、南の方袁術を滅して河南・江淮の地を收め勢頓に大なり。袁紹は地を河北に擴め公孫瓚を斬りて直隸・山西の地を併せしが遂に曹操に亡ぼさる。公孫度の子康も操に歸服す。操・兵を南して劉表を襄陽（湖北省襄陽府）に討つ。漢の景帝の後劉備時に襄陽に在りて名士諸葛亮を得・江東に奔りて孫權に合す。

權は堅の子なり。劉備を納れて與に操の軍を邀へ大に之を赤壁（湖北省武昌府）に破り遂に江南を掩有す。（獻帝建安三年皇紀八百六十八年西紀二百八年）蓋・謀臣周瑜の力なり。初め關東の亂るゝや劉璋・巴蜀に據る。魯肅・孫權に勸め湖南の地を劉備に貸し進んで巴蜀を取らしめ曹操を夾擊せんと謀る。備乃ち江を溯りて劉璋を降し巴蜀を定めしも湖南の地を返さず、湘水を界とし義

赤壁の戰

三國の鼎立

弟關羽をして江陵（湖北省荆州府）を守らしめ自ら北進して漢中を奪ふ。是に於て操は江北を領し、權は江南を有し、備其西に在り、天下三分の形勢成る。

劉備

曹操

孫權

西紀二百二十年曹操沒し子丕嗣ぎ、獻帝に迫りて位を讓らしめ、國號を魏といひ洛陽に都す、文帝是なり。劉備丕の簒立を聞き、巴蜀に據りて遙に漢統を繼ぐ、之を蜀漢の昭烈帝となす。後漢は光武帝より此に至るまで十三世・百九十六年にして滅ぶ。後九年にして孫權も亦帝位に即き國を吳と號し建業（江蘇省江寧府）に都す。之を三國といふ。

諸葛亮

是より先・蜀の關羽・江陵に據り威・華夏を振ひ、襄陽に出でゝ許を襲はんとす。曹操・大に恐れ孫權をして其後を襲ひて之を殺さしむ。劉備已に帝位に即き親ら大兵を率ゐて吳を侵し羽の怨を報ぜんとして吳將陸遜の爲に破られ遂に白帝城（四川省夔州府）に崩ず。太子禪嗣ぎ諸葛亮・政を輔け、好を吳に修めて共に

諸葛亮の北伐

魏に嚮ふ。魏の文帝親ら大軍を率ゐて南吳を征すること二回、共に江を渡らずして師を班へす。蜀は諸葛亮内外の事に鞠躬盡瘁し、專ら魏を伐つを力め、先づ南蠻を征服して後顧の患を絶ち、然る後北伐の師を起し進んで祁山（甘粛省鞏昌府）に出づ。其將馬謖節度に違ひ蜀軍街亭（甘粛省秦州府）に大敗す。亮再北征して陳倉（陝西省鳳翔府）を圍みしも糧食繼かず。後屢魏を伐ちしも糧兵並に匱しく常に志を得ざりしかば、專ら力を勸農講武に用ゐ、遂に吳と約して魏を侵す、時に魏の文帝已に崩じ明帝位に在り自ら出でゝ吳師を退け、河内の人司馬懿をして亮に當らしむ。亮懿と五丈原に相持し連に戰を挑めども懿壘を堅くして應せず。亮兵を分ちて屯田し持久策を講じ、又巾幗を懿に贈りて之を激せんとす。懿猶出でず西紀二百三十四年亮遂に病を獲て陣中に薨じ、姜維等軍を收めて歸り、蜀の勢是より衰ふ。」

司馬氏の專權

魏は曹操以來諸帝多く刻薄にして骨肉を疎害し帝室孤立す。明帝崩じて齊王芳立つや、司馬懿曹爽を殺し自家樹立の計を爲し、自ら丞相となりて國政を左右す。懿の子師專恣にして帝を廢し明帝の姪高貴鄉公髦を迎立し、師薨じ弟昭代り大將軍となり大都督の號を加ふ。其間毋丘儉文欽諸葛誕等前後兵を擧げて司馬氏に反抗したれ共皆敗死し、復一人の曹家の爲に圖る者無きに至り、昭遂に相國となり晉公に封ぜられ、帝を弑して元帝を立つ。蜀は亮薨じて後姜維兵權を握り、才武を恃みて屢魏を侵し、狄道（甘粛省蘭州府）祁山に出づ。昭之を患ひ鍾會鄧艾を用ゐて蜀を討たしむ。時

蜀の滅亡

魏吳亡ぶ

に蜀は後帝・嬖臣・俺寺を寵用して內政亂れ、屢・北征の擧ありて國力消盡せり。二將其弊に乘じ、鍾會は斜谷（陝西省鳳翔府）駱谷・子午谷（陝西省西安府）より入り劍關（四川省保寧府）に至りて姜維に扼せられ、鄧艾は狄道より陰平（甘肅省階州省）を經て成都に入る。後帝面縛して出で降り昭烈帝より二世・四十三年にして蜀滅ぶ時に西紀二百六十四年なり。是に於て司馬昭の威望益高く、九錫を加へて晉王となり、蜀滅ぶるの後二年その子炎魏の帝位を簒ふ。晉の武帝是なり。後・十五年にして吳も亦晉に滅さる。三國分立以來凡六十年にして晉復支那を統一せり。

第七章　晉、五胡十六國

西晉の武帝

八王の亂

晉の武帝即位の初は江南になほ吳國のありしを以て大に意を治道に用ゐたりしも、杜預・王濬・江を渡りて建業を降しゝより、漸く政に倦み內宴に耽り武備を撤す。加ふるに晉は魏室の敗亡に懲り多く宗室を封じて藩屏とせしかば、諸王の威望重くして大政を覬覦し遂に八王の亂を生ぜり。

武帝の崩ずるや惠帝位に即きて不慧なり。汝南王亮國政を總べ威福を弄ぶ。賈皇后・楚王瑋に謀りて亮を除き、尋で瑋を殺し遂に太子及太后を弑す。趙王倫・皇后を黜け自帝を稱す。齊王冏・河間王顒・成都王穎・與に倫を誅し、大政冏の手に歸せしかば、長沙王乂・冏を殺す。顒と穎と力を合せて乂を破りしに、東海王越・惠帝を奉じて二王を逐ふ。此間前後十六年・骨肉互に牋害して晉室の藩屏遂に空し。

魏吳亡ぶ

に蜀は後帝・嬖臣・俺寺を寵用して內政亂れ、屢北征の擧ありて國力消盡せり。二將其弊に乘じ、鍾會は斜谷（陝西省鳳翔府）駱谷・子午谷（陝西省西安府）より入り劍閣（四川省保寧府）に至りて姜維に扼せられ、鄧艾は狄道より陰平（甘肅省階州省）を經て成都に入る。後帝面縛して出で降り昭烈帝より二世・四十三年にして蜀滅ぶ時に西紀二百六十四年なり。是に於て司馬昭の威望益高く、九錫を加へて晉王となり、蜀滅ぶるの後二年その子炎魏の帝位を簒ふ。晉の武帝是なり。後十五年にして吳も亦晉に滅さる。三國分立以來凡六十年にして晉復び支那を統一せり。

第七章　晉、五胡十六國

西晉の武帝

八王の亂

「晉の武帝即位の初は江南になほ吳國のありしを以て大に意を治道に用ゐたりしも、杜預・王濬・江を渡りて建業を降しゝより、漸く政に倦み內宴に耽り武備を撤す。加ふるに晉は魏室の敗亡に懲り多く宗室を封じて藩屏とせしかば、諸王の威望重くして大政を覬覦し遂に八王の亂を生ぜり。

武帝の崩ずるや惠帝位に即きて不慧なり。汝南王亮國政を總べ威福を弄ぶ。賈皇后・楚王瑋に謀りて亮を除き、尋で瑋を殺し遂に太子及太后を弑す。趙王倫・皇后を黜け自帝を稱す。齊王冏・河間王顒・成都王穎・與に倫を誅し、大政冏の手に歸せしかば、長沙王乂・冏を殺す。顒と穎と力を合せて乂を破りしに、東海王越・惠帝を奉じて二王を逐ふ。此間前後十六年・骨肉互に牋害して晉室の藩屏遂に空し。」

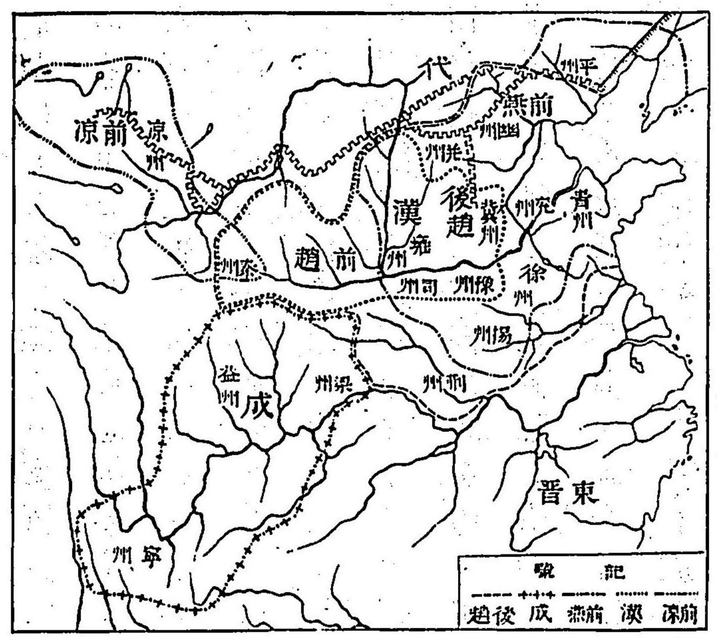
清談の流行

五胡

東漢の末、名節の士多く離亂を厭ひて高踏勇退の風生じ、兩漢崇儒の反動は黄老無爲の道を想はしめ、佛教東流の餘響を受けて魏・晉の際清談の流行を來たせり。清談は俗論に對する名にして、法度禮節を擲棄し世事俗務を排擺し、專・虚玄空理を談ずるの謂なり。此俗・一世を風靡するや上・朝廷の大臣より下・草莽の處士に至るまで、名教を卑しみ放達を尚び八王の亂生じて晉室動搖せるも殆一人の國家民人を憂ふる者無きに至り夷狄・其間に乘じて蜂起し司馬氏遂に江南に遷る。之を東晉といふ。時に西紀三百十六年なり。

晉室の衰へて司馬氏東に遷るや氐・羌・羯・匈奴・鮮卑の諸胡・中國に割據し國を建つるもの前後十六・東晉の世を經て南北の二朝となれり。氐は初・岷山より巴蜀の間に散在し、羌は青海の地に居る。後漢の世・馬援に降りて關中・河東に徙されて後・餘衆亦多く塞内に入る。西晉の武帝の時匈奴多く歸化して山西に移り鮮卑は遼西に居る。晉の亂るゝや匈奴の劉淵・左國城（山西省汾州府）に起り、平陽（山西省平陽府）に遷りて漢帝と稱す。其子聰に至り劉曜・石勒を遣り洛陽を陷れて懐帝を執へ、尋で曜・長安を取り愍帝を降

前後兩趙



肥水の戰以前の北方の形勢

漢・燕

し西晉を滅し自立して趙王と號せり。石勒は匈奴の別種・羯人にして曜と隙あり、襄國（直隸省順德府）に據りて亦趙國を立て河北・山東を併せ、洛陽を界として曜と劉漢の地を分つ。史家・曜を前趙・勒を後趙といふ。先是・巴西の氐・李雄成都に入り四川・貴州を併せ成帝と號し後・其弟壽嗣ぎ立ち國號を漢と改む。劉淵・李雄の起るや、鮮卑の慕容廆・諸部を併せ遼の東西を掩有し大單于と稱せしが、其子皝嗣ぎて燕王と號し、南・後趙を擊ち東・高勾驪を破り勢日に熾なり。皝が嗣立の前數年・後趙の石勒・劉曜を洛陽に擒にして悉く劉漢の舊地を併せ、南・東晉を擊ちて地を江淮に開きて帝を稱し稍太平を致しゝが、勒死して石弘・石虎相次ぎ、虎死して冉閔・國を簒ひ魏帝と號す。是に於て氐酋符洪・關中に據りて秦王と號し、張重華・河西に據りて涼王と號し、江北復亂る。燕王皝の子儁之を機として河北に入り魏帝冉閔を滅ぼし山東を併せ河南を略し都を鄴に奠めて帝と號し勢江北を呑む。（東晉穆帝永和五年西紀三百四十九年皇紀千九年）

東晉

初西晉の愍帝・劉曜に降るや、司馬懿の曾孫琅琊王睿帝位に建康（建業）に即き王導・王敦を用ゐ政・兵を分掌せしむ。東晉の元帝是なり。明帝・成帝・康帝の世は內亂相繼ぎ、未だ驥足を北方に伸ぶる能はざりしが、穆帝に至り桓溫を擧げて軍事を督せしむ。溫乃ち西の方・巴蜀に入り漢を亡ぼし、勢に乘じて秦王符健を長安に攻めて拔く能はず、更に燕を討ちて枋得（河南省術輝府）に敗れて還る。秦は符健死して姪・堅位に即き王猛を信任し鄴を陷れて燕を滅ぼす。時に涼王張重華は

秦王符堅

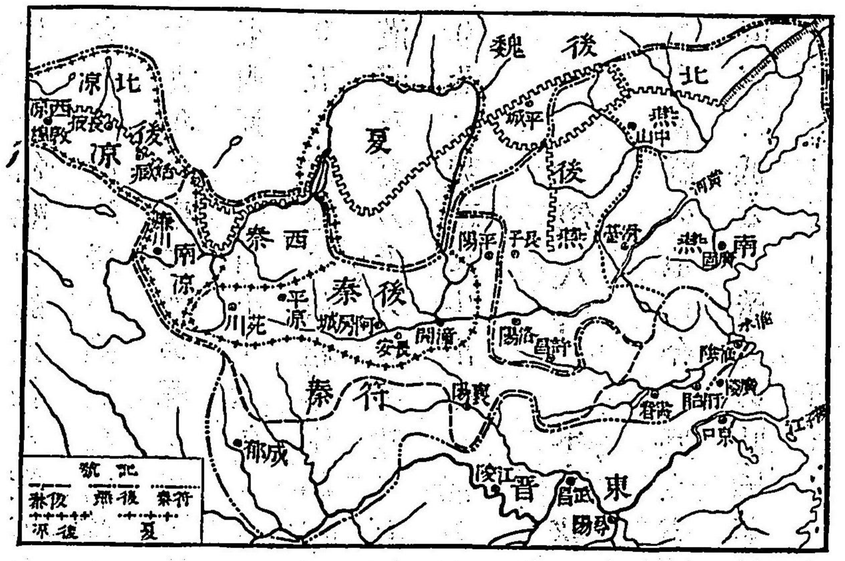
肥水の戰

姑臧（甘肅省涼州府）に據り東・隴西より西・龜茲・鄯善に抵り勢頗大なりしも弟天錫に至り政亂る。秦王符堅討ちて涼を滅ぼし、氐酋呂光を遣り西域を徇へしめ、又鮮卑拓跋部の地を奪ひ、天下の七八を掩有して西紀三百八十三年遂に南・晉に向ふ。

其兵卒六十萬・騎二十七萬・勢江南を振撼す。時に晉は桓溫已に沒し謝玄を擧げて秦に當らしむ。玄・衆八萬を以て大に秦兵を肥水に破る。堅厪に身を以て免る。後幾ならずして秦遂に亡ぶ。秦・肥水に敗れてより江北は分裂し燕の宗室慕容垂は中山（直隸省定州府）に據りて後燕と號し、羌酋姚萇は後秦と號して長安に起り、鮮卑の乞伏乾歸は隴西に西秦を建て、河湟・青海の間には鮮卑の禿髮烏孤・南涼を建て、河西の地には呂光・後涼を創め、張掖（甘肅省甘州府）には匈奴の喬・沮渠蒙

江北の分裂

拓跋魏



遜の北涼國、其西燉煌（甘肅省安西府）には漢人李暠の西涼國起る。然るに鮮卑の拓跋珪・盛樂（山西省歸化城）に崛起し魏國を建て南下して後燕を滅ぼし。燕は分裂して慕容德が滑台（河南省衛輝府）の南燕・馮跋が龍城（內蒙古土默特）の北燕となる。珪・帝位に即く、後魏の道武帝是なり。後秦は後涼を亡ぼし南・北・西の三涼を臣服し勢江北を傾

肥水の戰

後秦の形勢

北方

劉宋

けしが、匈奴の赫連勃々・朔方に夏國を建てしより其勢漸く衰ふ。此時晋の劉裕は南燕を滅ぼし後秦を降し西紀四百十九年建康に晋の禪を受く。是を宋の武帝となす。晋は東西通じて百五十六年にして遂に亡びたり。西晋の末より五胡・内地に跋扈し兩趙（前、後）・三秦（前、後、西）・四燕（前、後、南、北）五涼（前、後、南、北、西）漢成及夏の十六國を建て互に相攻伐すること百餘年是に至り北に魏・南に宋出でゝ江の南北に雄視せり。

第八章　東方諸國の古史

古朝鮮

古朝鮮の地は今の盛京省の南部にして東・大同江より西・遼河に抵る。帝堯の時・國祖檀君・平壤に國を建つること傳ふれども史籍の考ふ可きなし、殷亡びて箕子其地に奔りて王たり。箕準の世に及びて燕人衞滿の爲に國を簒はれ馬韓に遁る。漢の武帝の朝鮮を伐つや滿の孫右渠よく防ぎ屢漢兵を破りしも後・反臣の手に弑せられて其地・漢に内附し古朝鮮滅ぶ時に西紀前百八年なり。

三韓

當時漢江以南には諸韓族・蕃殖し馬韓・辨韓・辰韓の三國起る。辰韓は其民嘗て秦民たりしを以て一に秦韓と號す。三韓の中馬韓最大にして今の忠清・全羅兩道の地より京畿道の南部に及び、辨韓は慶尙道の西南部・辰韓は其東北部を領せり。箕準の國を衞氏に簒はるゝや馬韓に入りて王となり、次で他の二韓を併せ子孫相繼ぐこと二百餘年、漢末に至り扶餘の溫祚に滅ぼさる。

貊種の南下するや咸鏡道に入りて沃沮となり江原道に

濊貊となり就中扶餘は其滿州の南に留りしものにして、も
と松花江の流域に蕃殖せし藁離國より出で、挹婁（肅愼）を東に
し鮮卑を西にす。則今の盛京省の北に當れり。扶餘南移
の際其衆中途に留り長白山の東北・滿州東部に居るものを
彼と分ちて南扶餘とす。漢の季世・扶餘國王の子骨表・國難
を避けて古朝鮮の故土に入り、都を拂流水（鴨綠江の上流）上に定め、
沸流國主を服し荇人（長白山附近）及北沃沮を滅して國を立つ。
高勾驪の始祖朱蒙是なり。朱蒙の國を建つるや、其少子尉
仇台・國を避け、南扶餘を統率して馬韓の慰禮城（忠淸道稷山縣）に據
りて箕氏に代る。之を百濟の祖王溫祚となす。二國共に
扶餘に出でたり。時に辰韓に朴赫居世出でゝ其六部を併
せ金城（慶尙道慶州）に都し四世にして昔氏に至り國を鷄林と號

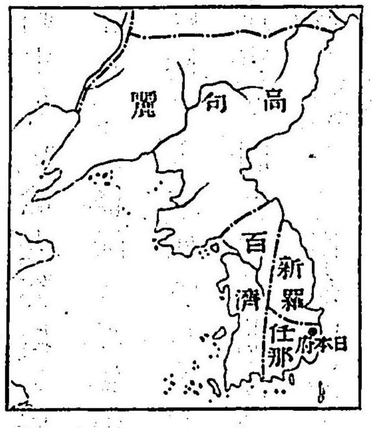
三國の鼎立

し高勾驪・百濟と鼎立の基を開く。高勾驪は漢末・王氏の亂
に乘じて新の邊境を侵し後漢の光武の爲に擊卻されしも
是より屢遼東に寇す。後漢の末・公孫康之を討て丸都山下
嵯に逐ひしに、三國の時又西安平に入寇せしかば、魏の幽州
刺史毋丘儉丸都城を屠る。高勾驪王位宮・遁れて南沃沮に
奔りしが、後歸りて樂浪・帶方の地を略し黃城（平壤の東）に築きて
國都となす、西晉の末に及と南・平安・黃海兩道の地を略取し西・
遼東を圖る。前燕の慕容氏之を討て其故國原王を破り丸都
城を陷る。高勾驪乃チ臣と稱し都を國內城（盛京省興京）に徙す。百
濟は此時殆マ馬韓の地を統一し溫祚七世の孫・近肖古王は高
勾驪の故國原王を擊破し其黃海道一帶の領土を略取し都
を北の方・北漢山（京城）に遷す。二國之より累世の仇敵となれ

り。鷄林は金氏に至り國號を新羅と改め始て王と稱す。於是高勾驪・百濟・新羅の三國鼎立の形勢成る。後漢の初・辨韓の地に駕洛・大伽耶・小伽耶・安羅伽耶・星山伽耶・古寧伽耶の六部落ありしが新羅・百濟の間に介在せるを以て二國の盛なるや之小當るを得ず、日本に投じて保護を求む。我朝崇神天皇の御宇に當れり（皇紀六百二十八年西紀前三三年）後・神功皇后・新羅を征して國王奈勿を降せしかば百濟自・安んせず亦朝貢して、我保護を求む。我乃ち辨韓の故地に任那府を置て駕洛諸邦・新羅・百濟を保護し國威朝鮮半島の南半に遍ねし。

任那

三韓と日本



朝鮮半島

高勾驪は燕の慕容氏の支那内地に移りてより悉く遼左の地を略し百濟の侵地を復し故國原王の孫・廣開土王に至り新羅を援けて頻に我と戰ふ。後・新羅は復・我國に隷屬せしも、高勾驪は勢を負ふて服せず、南北兩朝に臣事し靺鞨種族と結託して北顧の憂を絶ち、連りに南下の策を回せり。

大月氏の勃興

第九章　大月氏及印度　佛教の東流

大月氏は匈奴と烏孫とに逐はれて天山南路の地を失ひ、西に奔りて大夏を擊破し嬀水（阿母河）の畔に大月氏國を建つ。大夏の餘衆は南・興都克士山を踰にて可不（カブール）里地方に高附國を建て、塞種も亦大月氏に逐はれて罽賓に遁れ漸く勢を西・北印度に振ひしが。大月氏に丘就却王出づるに及び、西は安息國を破り南は高附國を併せ、其子閻膏珍王遂に罽賓の

佛教の二大派

塞種を討滅して北・西印度を併せ、其版圖は可不里より中央亞細亞を經て葱嶺以東に及べり。

中天竺摩羯陀國王阿輸迦大に佛教を奬勵し、其長子摩醯因陀羅は之を南方に傳へたりしが。大月氏國王迦膩色迦後漢の初に出で、尤厚く佛法に歸依し罽賓に僧侶五百人を集めて第四回の結集を開けり。南方の佛教徒は此結集に與らずして、獅子國を中心として所謂南派の佛教となりぬ。而して佛教興隆の古地摩羯陀國は迦膩色迦王の前殆九十年、南印度より起りしアンドラ朝の爲に併せられ、婆羅門教再勢力を恢復して佛教漸く振はずなり行くまゝに、佛徒の北に奔りて大月氏に投ずる者頗る多く、就中馬鳴・龍樹等の諸名僧相繼ぎて出で、北印度・罽賓の地は佛教の中心となれり。之を北派佛教となす。大乘教是なり。

佛教の東流

印度の僧は既に秦の世に支那に入れりといへども其事詳ならず漢の武帝の時・霍去病・匈奴を征し佛像を得て還り帝に獻ぜしかば、帝更に張騫を西域に遣りて求めしむ。後・成帝も亦・景德を印度に遣りし事あり。而も當時經文の飜譯なく從て其教理を知るに由なきを以て、佛教の密傳時代と謂ふ可し。後漢の明帝の世は恰も大月氏の迦膩色迦の治世に當り、北方佛教は隆盛をきはめ天山南路の諸國に傳播せしかば、明帝の永平七年（西紀六十四年）蔡愔等を西方に遣はし佛法を求めしむ。愔・大月氏に至り佛經・佛像を得・攝摩騰・竺法蘭の二僧を伴ひて歸り白馬寺を洛陽に立つ。實に釋迦滅後五百四十年なり。摩騰等漢語を修め佛經を翻譯せし

に道家の徒・褚善信等之を爭ひ後遂に道・佛二教の軋轢を生ぜり。而して漢威の西域に遍く交通の便開くるに及びて月氏よりは支婁迦讖・安息よりは安世高・印度よりは竺佛朔・康居よりは康孟詳等相前後して支那に入りて譯經に從事し、諸帝も亦之に歸依するもの多く、東漢の季世より佛教漸次弘通し、三國時代には魏最も信者多く、朱子行始て僧となり佛經を于闐に求め、司馬晉に及ひて此教益隆盛に赴けり。東晉の時秦主符健は僧順道を海東に遣りて高勾驪に佛教を傳へ、（東晉簡文帝咸安二年）後十二年にして晉は摩羅難陀をして之を百濟に弘通せしむ。而して高勾驪は之を新羅に傳へ、百濟は之を我國に傳へたり、實に欽明天皇の十三年（梁光元帝承聖元年皇紀千二百十二年西紀五百五十二年）に當れり。

北魏と宋

第十章　宋・齊・梁・魏

東晉の安帝の末年・西秦は南凉を滅ぼしたりしが、劉裕・晉室に代りて宋の武帝となるや、夏主赫連勃々・關中の地を略して西秦を滅ぼし隴西を併せたり。時に北凉は西凉を降して河西の地を統一し、鮮卑の吐谷渾は青海・河湟の地を略し、夏と關西に鼎立して互に相攻伐す。魏は道武帝の後・明元帝を經て、太武帝・宋の文帝と時を同うして位を踐み・勇健にして善く兵を用ゐ、北燕を滅ぼし夏・北凉及吐谷渾を降して、悉く江北の地を定め江南の宋と對峙す。之を南北兩朝といふ。明元帝嘗て河南の地を略せしかば宋の文帝之を聊み、遂に王玄謨をして大擧して魏に入寇せしめ、碻磝（山東省東

昌府を取りて滑臺（直隸省衛輝府）を圍む。太武帝正に北伐より還り、自ら河を渡り衆百萬と號す。大に南軍を破り玄謨を走らし、其過ぐる所四野赤地となり、淮北皆魏の有に歸す。宋は此一敗より復振はず、三傳して明帝に至る。其間多く宗室を殺戮して王室孤立し權臣蕭道成の爲に國を簒はれて滅ぶ。

魏の極盛

時に西紀五百一年なり後魏は文武帝・太武帝の經略の後を承け、專ら民と休息し富國の策を講じ、獻文帝を經て孝文帝に至り中國の文化を慕ふて都を洛陽に遷し姓を元と改め胡服・胡語を禁じ禮樂を興し制度を定め百般の文物備はりて極盛に達せり。孝文帝崩じ宣武帝嗣立して宗室を疎んじ嬖倖を用ゐ政寖亂る。其子孝明帝の世・平城藩衛の將士・資給の薄きを怨みて叛く。

魏の分裂

爾朱榮亂を平らげ功を負ふて專横なり。孝莊帝・手から榮を誅す。爾朱氏の族並び叛く。朔方の鎮將高歡・爾朱氏を討ちて之を破り、孝武帝を擁立して大丞相となり、府を晉陽（山西省太原府）に開き遂に帝を逐ふ。帝奔りて關西の大都督宇文泰に據り長安に都す。是を西魏となす。

東西魏

南北朝

高歡乃別に孝靜帝を鄴に立てゝ宇文氏と潼關に相拒ぐ。東魏といふは是なり。然れ共其實は高・宇文二氏の割據にして魏室は其名を存するに過ぎざるなり。（梁武帝大同元年西紀五百三十五年）

齊

是より先き江南は蕭道成・宋を簒ひて齊の高帝となりしが、五傳して東昏侯寶卷に至り國政亂れて四方叛く。其疎

族蕭懿・叛亂を鎮定して聲望隆く寶卷の爲に忌み殺さる、懿の弟衍・寶卷の弟寶融を奉じ兵を擧げて建康に入り翌年（後魏宣武帝景明二年西紀五百〇一年）齊の禪を受けて帝位に即き梁の武帝といふ。時に東魏の高歡卒し子澄・大丞相を襲ぎ河南軍事都督侯景と隙あり。景・河南の地を以て梁に降りて河南王となり東魏を伐ちて大敗し南に奔りて壽陽に據る。梁武帝江南に帝たる已に四十八年、深く佛法に歸依して慈善を奉行し、刑辟弛みて武備廢す。是に至り東魏を伐ちて克たずして和を成す。侯景之を怨み兵を擧げて健康を陷れ武帝の大丞相となり、武帝憂忿して崩ずるの後、簡帝を弑し蕭棟を廢し自立して帝と稱す、時に東魏の高澄は盜に殺され弟洋丞相となり孝靜帝の禪を受けて北齊と號す。梁室亂れて

武帝の子蕭繹は江陵に據り、其弟倫は江夏（湖北省武昌府）に、武帝の孫蕭詧は襄陽に據りて互に相爭ひ、綸は東魏に降り、詧は西魏に賴る。於是、西魏は巴・蜀を略取し湖北を圖り、東魏は江淮の地を取り、梁の封土日に蹙る。而して繹は王僧辨を遣り陳霸先と與に侯景を誅せしめて位に即く。梁の元帝是なり。西魏の宇文泰之を伐ちて江陵を陷れ蕭詧を立てゝ梁王となす。元帝の崩ずるや北齊兵を發して蕭淵明を梁主となし王僧辨之を奉ず。陳霸先は元帝の子蕭方智を擁立して僧辨を破り西紀五百五十七年自・梁帝の位を簒ふ。陳の武帝とは是なり。而して西魏の宇文泰も同年を以て卒し子覺・魏の禪を受けて周の孝閔帝となれり。

第十一章　陳・北齊・周・隋　柔然・突厥

陳・北齊・周

陳は梁の後をうけて江南を有し、北齊は東魏の禪を受けて江北に據り、而して周は西魏に代りて漢・湘二水以西を保ち。天下を三分せり。北齊は文宣帝高洋の後三傳して帝緯、位を嗣ぎ昏愚にして國政紊れしば〳〵陳に侵さる。時に周に武帝出で剛毅賢明克く國を治む、西紀五百七十七年

隋

「自將として北齊を伐ちて之を滅ぼす。」「武帝の孫・靜帝に至り年幼くして太后の父楊堅政を輔け尋で其禪を受く。之を隋の文帝となす。」初梁の蕭詧・湖北の地を保ち後梁と號して周の藩屏たりしが、文帝位に即きて伐ちて其土を併せ。其翌年陳の後主叔寶が淫虐奢侈にして民心離畔せるに乘じ晉王廣を遣り一舉して陳を滅ぼ江南・江北・隋に歸し天下

隋の煬帝

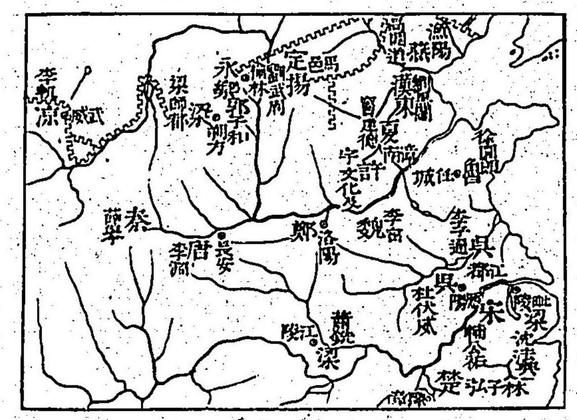
遂に復、統一せり時に西紀五百八十九年なり、晉室衰へて五胡割據を始め劉淵左國城に起りしよりこゝに至りて二百「八十六年なり。「文帝既に天下を統一して專意を內治に用ゐ、刑律・制度を更定し散樂雜技を禁じ、勤儉を以て下を率ゐ賦稅を減じて民を休めしかば、戶口滋殖して天下泰平なりき。然るに長子勇・帝の意に忤ひて廢せられ、次子廣太子となりしが遂に帝を弒して自立す。煬帝是なり。帝性豪華を愛し、內は盛に土木を興し、長安を西京とし洛陽を東都となし、二百萬丁を役して宮殿苑囿を造營し、百萬口を發して刊溝（江蘇運河）永濟溝（衛江）江南河（浙江運河）等を開通し、大行山を穿ち て馳道を通じ、長城を築きて榆林より紫河（歸化城の西北）に達し、南狩北巡下民の困弊を顧みず。外は頻に遠略を試み、裴矩を

隋末の群雄

河西に遣りて西域の賈人を誘はしめ、土谷渾の餘衆を擊ちて西の方・青海の地を開き、海を渡りて東の方・流球を征し、林邑を平げ高勾驪を招く。高勾驪應ぜず。帝赫怒し無名の師百萬を發して遼東に出で、軍覆り兵憊れて其効を收むる能はざるもの兩度に及び、財盡き士怨み百姓困窮して豪傑各地に競起り、小康二十餘年にして天下また亂麻の如し。

煬帝政を失して群雄四方に起り帝王を稱する者甚多し。林士弘は九江・臨川・南康・宜春の諸郡を取りて楚帝と稱し、杜伏威は歷陽に據りて總管と稱し、漳南（山東省東昌府）の竇建德は長樂王と稱し河北を取りて國を夏と號し。長安の李密は楚公楊玄感に從ひて黎陽に起り、玄感敗るゝに及び更に翟讓等と滎陽を下し自ら魏公と號し。馬邑の劉武周は突厥に

柔然の興亡



に推されて定陽可汗と號し、朔方の梁師都は梁帝と號して突厥に通ず。金城の薛舉は隴西に據りて西秦霸王と稱し遂に秦帝と號し、武威の李軌は河西に據りて大涼王と稱し、羅川の蕭銑は巴陵に起りて梁王と號す、李世民此間に出て、父淵を奉じて兵を晉陽（山西省太原府）に起し、遂に群雄を平定して唐室を興せり。

「柔然また蠕蠕といふ。もと匈奴の別種にして東晉の初・車鹿會なる者・部衆に推されて國を建てゝ柔然と號し、世・拓跋氏に隷屬して漠の南北に散居す。後・六世にして社崙あり。後

秦に通じて魏を侵し、道武帝に逐はれて漠北に遁れ高車の零丁を擊ちて其東邊を略取し、匈奴の餘裔を額根河畔に破り東・朝鮮より西・焉者に抵り、南・大磧より北・砂漠を渡るまでの大領土を掩有して自ら可汗と號し屢・後魏を侵して前敗に報ゆ。太武帝・江北を統一して塞外の諸國を招降するや、獨・柔然の服せざるを以て之を伐ち、社崙の從弟大檀を破り、北ぐるを追ふて燕然山に至り、其部衆殆百萬を降す。柔然これより頓に衰へしが、大檀五世の孫醜奴可汗の世に及び、塞外の諸部落を平定して

突厥帝國

國勢復盛なり。醜奴の弟頭兵可汗の時、魏は東西に分れて相爭ひ各幣を厚くして柔然の歡心を求めしかば、頭兵驕傲にして突厥の婚を退け、却て其滅ぼすところとなれり。時に西紀五百五十五年なり。

隋代西北の形勢

突厥は北匈奴の支族にして金山（阿泰山）の南に居り世々柔然に臣屬せしが、梁の頃・其部長土門・高車を破りて其衆五萬餘を下し國勢初て盛なり。乃婚を柔然の頭兵可汗に求めて卻けられ、自立して伊列可汗と號し、柔然を伐ちて頭兵を殺す。伊列の子木杆可汗遂に柔然を滅ぼし嚈噠を破り、南・吐谷渾を降

東西突厥

し、東・契丹を擊ち、北・結骨を滅ぼし、威令遠く遼東より西海に及び、青海より貝加爾湖に振ふ。乃チ木汗は東・都斤山（外蒙古杭愛山附近）に治し東方諸國を統領し、從弟達頭可汗は西・千泉（中央亞細亞塔拉斯河附近）に居り西方諸國を支配して東西に分れたり。西突厥は東羅馬と連和して連に波斯を苦しめ大に其領土を擴む。東突厥は連に支那の西北邊境を侵しゝかば周・齊の諸帝皆婚を通じて其歡心を結ぶ。隋初・木杆の從子・沙鉢略可汗・隴西に入寇して文帝に破らる。沙鉢略の子都藍立ち從弟染干と隙あり。染干・隋に奔り其援を得て歸りて故土を平定せり。啓民可汗是なり。隋室の傾くや啓民の子・始畢可汗復邊に寇す。群雄多く爭て臣と稱して其後援を仰ぐ。李唐の如きも亦然り。」

李唐の統一

第三編

第一章　唐初の治　武・韋の禍

「隋の時・突厥連りに邊に寇す。煬帝李淵を太原留守となして之を防がしむ。淵の次子世民・隋室の亂るゝを見、援を突厥に借り淵を奉じて兵を擧げ、長安を取り代王都を恭帝となし淵を丞相となす。尋て淵・恭帝の禪を受け國を唐と號し世民を東方に遣り群雄を平定せしむ。時に煬帝江都に在りて日夜宴飲に耽る。其臣宇文化及之を弑し隋滅ぶ。時に西紀六百十八年なり。李密・宇文化及を破る。王世充・李密を滅ぼし洛陽に據り鄭帝と稱す。世民先づ劉武周を擊破し、王世充を降し、竇建德を擒にして黃河流域の地を定

め。次に將を遣りて梁・楚を平らげ朔方を定め天下復唐に一統せらる。皆世民の功なり。其兄建成・弟元吉・世民の功名を嫉み之を殺さんと謀り却て世民に殺さる。世民乃高祖淵の禪を受けて帝たり。」

太宗貞觀の治

「秦王世民は實に唐業創成の人にして、初より高祖を扶けて内政の釐革を圖り、其禪を受けて位に即くや、杜如晦・房玄齡等をあげて政治を總べしめ、魏徵・王珪等を顧問となし、大に心を政治に用ゐて官制を改定し、官吏登庸法を制し田稅の法・兵・刑の制を革め、校舍を盛にして文學を奬勵し、府兵を置きて武備を嚴にし、刑辟を賦稅を輕減して蒼生を撫恤し、海内無事にして德化四陲に及び、貞觀の治は秦漢以來第一と稱せらる。崩じて太宗と謚す。太子嗣ぐ。之を高宗

高宗

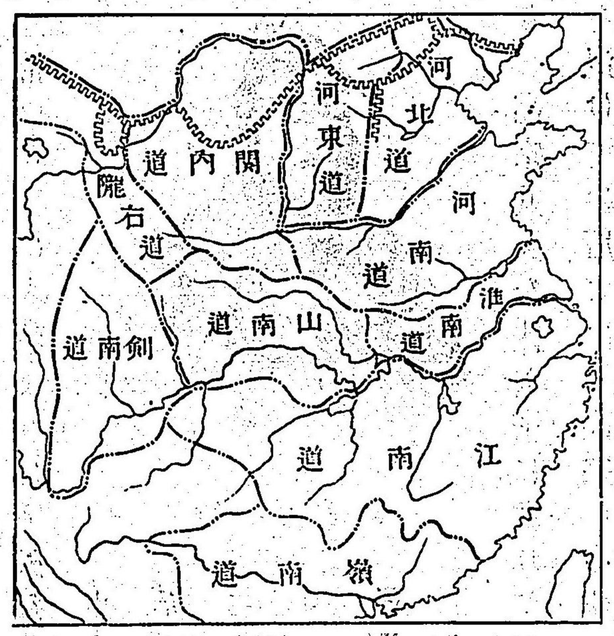
となす。其初年は長孫無忌・褚遂良・李勣等文武の名臣太宗の遺詔を受けて輔翼扶佐し天下頗る太平なりき。然れ共二帝の功業は内治よりは寧外征に在り。唐初四十年間に東・中・南三方の亞細亞大陸は殆ど唐の羈絆に屈し、漢族は實に空前絶後の盛運を窮めたりしが、内は却て武・韋兩氏の亂闇閨の間より起れり。

武氏の亂

太宗

太宗の後宮に才人武氏あり。高宗其美を聞き密に納れて昭儀となす。武氏乃王后を退けて皇后となり、高宗の多疾なるを乘じ時を代りて政を決し、遂に大權を左右し勢・朝野を傾動す。高宗崩じて中

宗立つや、武氏・皇太后を以て政を秉り、尋で帝を廢して其弟睿宗を立て、自ら朝に臨みて制を稱す。越王貞・李敬業等前後兵を擧げて武氏を伐たんとす。武氏天下の已に服せざるを見、大に宗室・貴戚を誅殺して國號を周と改め、睿宗を廢して自・神聖皇帝と號して唐に代る。所謂則天武后なり。而も性明敏にしてよく人材を用ゐしかば、其初は將相皆其人を得て國政



唐の十道

揚りしも、晩年に至りて嬖倖に任用し朝政紊る。既にして病む。宰相張柬之等兵を發して嬖倖を斬り、武后に迫りて中宗の位を復せしむ。時に西紀七百五年なり。尋で后殂落し唐室復興る。

「初、中宗の武后に廢せらるゝや、皇后韋氏之に廬陵に從ひ常に艱苦を同うす。中宗深く之を恩とし、位に復するに及んで其爲すに任せしかば、韋氏遂に朝政に參與し、威・朝野を傾け、又竊に武三思と通じ、遂に中宗を弑し溫王重茂を立て、自・政を攝し、多く同族を引きて顯要の地を與ふ。睿宗の子臨淄王隆基兵を率ゐて宮に入り、韋后を斬り諸韋及其黨を誅除し溫王を廢して睿宗を立つ。後三年にして睿宗・位を隆基に讓れり。是を玄宗皇帝となす。」

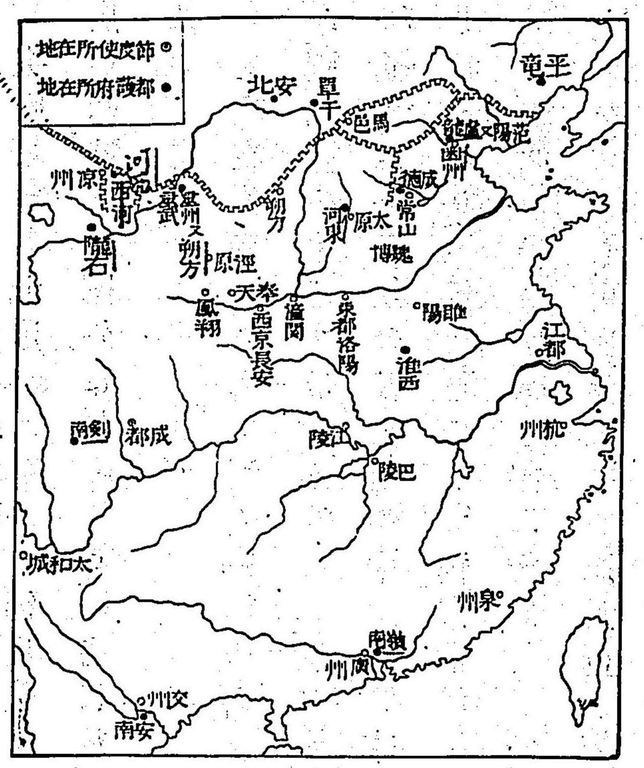
玄宗・開元の治

第二章　開元の治　安・史の亂

「隆基・睿宗の後を承けて玄宗となる。玄宗即位の初、精を勵まし治を圖り驕奢を禁じ賦斂を薄くし、姚崇・宋璟を擧げて相となす。崇は明敏にして吏才あり、權倖を抑へ諫諍を力め、璟は善く人を用ゐ刑賞よ私偏なし。後世賢相を言ふ者・姚・宋を以て房・杜と並べ稱せり。二相の後・張嘉貞・張說・李元紘・杜暹・韓休・張九齡等の良相相つぎ、國家殷富にして文學技藝並び興り、所謂開元三十年間の治を致せり。」

「初・太宗・府兵の制を設けて都督府を要地に配置せしも、其制破れて空名に屬し、睿宗の時初めて節度大使を置く。高宗の末年以來武・韋の禍ありて國威漸微なるに乘じ、外夷屢

邊境を擾すを以て、玄宗は四陲の要地に十節度使を置き、兵馬の大權を委ねて四方を經略せしむ。十節度使とは、黑龍江附近を鎭撫する平盧（內蒙古東部）の節度使、奚・契丹等を制する范陽（北京）の



節度使、回紇を禦ぐ河東（山西省太原府）及び朔方（甘肅省靈州府）の兩節度使、吐蕃に備ふる河西（甘肅省涼州府）隴右（全省寧府西）の兩節度使、吐蕃と苗

蠻とを防ぐ劍南（四川省成都府）の節度使、南海諸國を鎭する嶺南（廣東省廣州府）の節度使、西域諸國を抑制する安西（哈喇沙）の節度使、及專ら突厥に當る北庭（天山北路迪化府）の節度使、是なり。是によりて唐の勢威また塞外に張りしも、一方に於て藩鎭重權の禍源を成したり。

玄宗の驕怠

玄宗在位已に久しく漸く驕滿の念を生し奢侈・宴樂を好み、國用匱しくして收斂を事とし、初に宇文融を任用し次で楊愼矜・韋堅・王鉷の徒を信任す。時に李林甫・張九齡に代りて相となり、柔佞狡獪にして宦官宮嬪と結托し、帝意を迎合して聰明を壅蔽す、帝も亦內行治まらず、王皇后を廢して武惠妃を寵幸し、更に壽王の妃楊太眞を容れて貴妃となす。楊氏の族これより盛榮を極め驕侈を恣にし、楊國忠遂に林甫に代りて相となる。而して安祿山の亂は起れり。

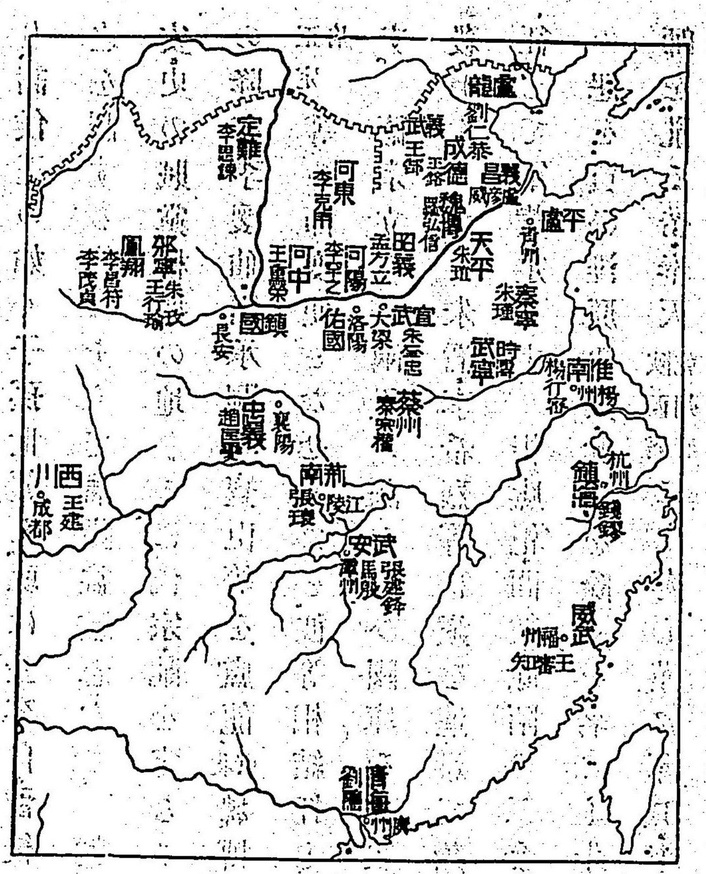
安祿山の反

「安祿山は營州の雜胡なり。狡黠にして勇略あり。巧に玄宗の寵妃楊氏の黨に結びて深く帝の信任を得、平盧・范陽・河東の三節度使を兼ね、土地・財賦・甲兵の權を握り、陰に異志を蓄ふ、唯林甫を憚りて發せず。楊國忠の相となるに及び、天寶十四年（西紀七百十五年）遂に反し、所部及奚・契丹の兵十五萬を率ゐて南に下り、河北を風靡して洛陽を陷れ、自大燕皇帝と號す。時に府兵の制廢れて已に久しく、よく賊軍に當る者なきを以て、安氏の軍進んで長安を犯し官兵を潼關に破る。玄宗・蜀に奔り位を太子に傳ふ。太子・靈武（甘肅省靈州）に即位す。肅宗是なり。郭子儀・李光弼等の勤王軍及回紇・西域の援兵來り會し官軍漸く振ふ。而して平原（山東省濟南府）に顏眞卿あり、

常山（直隸省正定府）に顏杲卿あり、睢陽（河南省歸德府）に張巡ありて國難よ殉し、山東・江淮の地を濟ふを得たり。然るに祿山・少子を愛して長子・慶緒の爲に弑せられ、慶緒も亦其將・史思明に弑せられ、史明も亦少子の愛に溺れて長子・朝義に弑せられ、賊勢頓に衰ふ。官軍其衰弊に乘じ先づ長安を復し、玄宗・肅宗之に入り、諸將を遣はして遺賊を平げしむ。肅宗崩じ代宗立ち、回紇の援兵を得て雍王造を遣はし諸道の兵を合せて史朝義を討破し洛陽を復す。賊將李懷仙・朝義を斬りて官軍に降り、八年の內亂此に平らぐ。之を天寶・安史の亂となす。而も塞外諸國これより唐を輕んじ藩鎭地方に跋扈して唐室衰運に傾けり。

史思明

藩鎭の跋扈



第三章　藩鎭・宦官の禍　唐末の大亂

初玄宗邊要の地に十節度使を置きしが、安・史の亂後・內地も亦安からざるを以て節度使を增設し、遂に偏藩鎭唐末に天下に布き、各數州を統べ割據甲兵・財賦の權を握

り、諸侯王の如く子孫世襲し、或は士卒自留後を定む。朝廷之を制する能はずして藩鎮益驕恣なり。就中河北の地は安・史の賊黨根據の地なるに、代宗亂を定むるに急にして、賊の降將李懷仙・田承嗣・李寶臣等を盧龍（北京）魏博（直隸名府）・成德（仝省）正定（府）等の節度使となせしにぞ、彼等相結托して朝命を奉ぜず。德宗立ちて兩稅の法を行ひ國庫を充實し藩鎮の勢を殺がんとす。朱滔・李希烈等諸鎮を連ねて叛く。官軍之を征して軍費足らず。相盧杞・間架・除陌の二令を發して天下の怨を買ひ、涇原の兵・此法を除くを名とし朱泚を奉じて京師を亂る、帝・奉天（陝西省乾州府）に出奔し僅に渾瑊・李晟の援により京を復するを得たり。憲宗・英武にして賢相杜黃裳の議に聽き姑息の策を改め名將・武元衡・裴度を遣りて淮西・河北

宦官の專横

李牛の黨爭

の諸藩を降し始めて藩鎮の横恣を制するを得たり。

宦官は初頗勢なかりしが、玄宗の晩年宴遊の盛なるより其數增加して漸く勢を得、肅宗・代宗・蒙塵の間に侍して機務に與り、德宗に至り禁軍を統べて勢威彌强く、人主の廢立を恣にするのみならず、憲宗・敬宗の二帝は遂にその手に斃れたり。文宗立ちて宦官の專横を患ひ、鄭注・李訓等と甘露の變を企てしも謀漏れて事成らず、却て宦官の暴威を高め、武宗・宣宗・懿宗・僖宗・昭宗等皆其の擁立する所となる。蓋穆宗の時李德裕・李宗閔と隙ありて之を構貶せしより朋黨の爭起り、文宗以後・宗閔は牛僧孺と李・牛の黨を結びて德裕に當り互に政權を爭ひ陷擠を事となす。宦官・其間に出入して漁夫の利を占め宰相を左右す。宣宗立ちて朋黨の三首領

沒して宰相の軋轢罷みしも、宦官の專横は外藩鎮の跋扈と共に根柢已に深くして、帝の英武を以てするも抑制するを能はず。帝崩じて懿宗・僖宗皆庸暗にして天下大に亂る。

懿宗即位の年・裘甫亂を浙東に起し、次で徐州に龐勛起る。康承訓・西突厥の別種・沙陀の力を借りて徐州を平げ。沙陀の酋長朱邪赤心・功を以て姓名を李國昌と賜はり振武の節度使となれり。僖宗即位の翌年王仙芝・兵を山東に起し河南・江淮の間を横行せしが、官軍の爲に敗死す。其部將黃巢・餘衆を率ゐて河南・江西・福建の諸州を剽掠し廣州・潭州を陷れ、一たび襄陽に敗れしも尋で宣・申二州を下し、洛陽を陷れ長安を取り齊帝を僭す。僖宗蜀に奔る。振武の李國昌の子・克用・勇略ありて一眼眇なり、獨眼龍と號す。兵を起して

李克用

唐に畔きしが黃巢の勢猖獗なるを以て克用の罪を許して賊を討たしむ。克用・沙陀を率ゐて黃巢を平ぐ。賊將朱溫降り名を全忠と賜ひ宣武の節度使となる、克用頗之を輕んじ二人遂に相敵視す。僖宗・蜀より還り長安に崩ず弟昭宗嗣ぎ宦官を誅せんと欲し全忠が汴（河南省開封府）に據りて勢ある を見て之を召す。全忠京師に入り宦官を誅し功を以て梁王となり帝を挾むで洛陽に遷る。是に於て豪傑四方に崛起し、北・幽州に燕王劉仁恭あり、晉陽に晉王李克用あり。南・楊州に吳王楊行密起り、杭州に吳越王錢鏐割據し、潭州に楚王馬殷あり。西には鳳翔に岐王李茂貞あり、成都に蜀王王建あり。皆唐室復興を名として相呑噬す。朱全忠は昭宗の英氣ありて恢復の大志あるを憚りしが、今群雄の唐室を

唐末の群雄

朱全忠

名として起るを見、異變の中より生ぜんことを恐れ、西紀九百七年遂に帝を弑し、其子哀帝を擁立し、尋で自帝位を簒ふ。後梁の太祖是なり。唐は高祖より是に至るまで二十世二百九十年にして滅びぬ。

第四章　東方諸國の盛衰

三國の形勢

南北朝の始・朝鮮半島の三國は高勾驪・最強大にして連、に南下を企て百濟を侵す。蓋鹵王之を防ぎて敗死せしより百濟は都を泗沘（忠清道扶餘縣）に遷して高勾驪の鋭鋒を避く。新羅も亦・高勾驪を恐れ百濟と同盟して其南下を防ぎしが、法興王に至り高勾驪と通じ、眞興王連、に百濟を侵し遂に我・任那府を陷れて其地を奪ひ、眞平・武烈兩王に至り國力益強し。

煬帝・太宗の東征

百濟時に我保護を受けしも更に高勾驪に後援を求む。高勾驪は新羅の隆盛を忌みて百濟と連和して之を侵略し且・好を陳に通ず。隋の文帝・陳を滅ほすに及びて、高勾驪の嬰陽王・靺鞨族を率ゐて遼西に入寇せり。

隋は文帝兵三十萬を發し高勾驪を征し嬰陽王の入寇に報ぜんとして功なくして還る。煬帝立ちて大に海・陸兩路の師を發して遼東に出で平壤を圍みしも城堅くして拔けず。師を班して敵の尾擊を受け九軍・薩水に覆る。高勾驪是より益・強横にして百濟と力を合せ連、に新羅を攻めしかば新羅は援を唐に乞ふ。唐・璽書を高勾驪に與へて新羅と和せしむ。時に高勾驪の泉蓋蘇文・其王を弑し從子・藏を立て威福を弄び、唐の命を奉せずして其使を屈辱す。太宗・赫

百濟の滅亡

怒し陸・海の大軍を起し李世勣等を用ゐ、親ら遼東に出で白巖城（盛京省遼陽州）を陷れ安市城（奉天府蓋平縣）を圍む。攻城六月にして拔けず。加之天寒く糧匱く人馬凍飢し効を奏せずして師を班す。時に西紀六百四十五年なり。

百濟は高勾驪と同盟して連に新羅を侵し任那の故地を取る。新羅は二國に侵略せられ唐に救を乞ふと急なり。高宗・乃ち蘇定方に兵を授け山東より海に浮び新羅の武烈王と會合して百濟を征せしむ。百濟の都城陷り義慈王出で降る。百濟の將福信等王弟豐璋の我國に質たるを迎へ我援兵を乞ひ恢復を圖る。我齊明天皇親く舟師を率ゐて筑紫に幸し、阿曇比邏夫等をして百濟を救はしめしが西紀六百六十三年皇師白江（錦江）口に敗れ、豐璋・高勾驪に奔り百濟滅ぶ。時に高勾驪の蓋蘇文已に沒し三子權を爭ふて國亂れ好を唐に通ずる者あり。高宗依つて李世勣に命じて之を討たしむ。世勣西紀六百六十八年を以て平壤を陷れ、王高臧を降し高勾驪を滅ぼして安東都護府を置く。

高勾驪滅亡

新羅の興隆

百濟・高勾驪の滅亡するや新羅は武烈王の子文武王位に在り。百濟の故地を蠶食して唐の戍兵を逐ひ、高勾驪の餘衆を使嗾して遼東を侵略し、平壤を陷れて安東都護府を移す。然れ共唐は中宗以後內訌屢起りて力を海東に用ゐる能はず。新羅王は唐の鷄林州大都督となり百濟の故地を取りて高勾驪に及び、殆朝鮮全土を併有し、聖德・景德二王心を民治に注ぎ、よく唐に仕へて遂に太平を致せり。

渤海の興亡

周の肅愼は漢・晉の時・挹婁といひ、後・勿吉と稱し、隋に至り

て靺鞨といふ。其速末水（穆倫河）邊に居りしものを粟末部落と名け、後鴨綠江上英額河畔に住し高勾驪と相接す。高勾驪の滅ぶるや其部人大祚榮營州に徙り、乞々仲象に至り更に東走して、高勾驪の故地を略定し、肅愼・扶餘を服屬し、唐、玄宗の爲に渤海郡王に封ぜらる。其子武藝地を平安・咸鏡二道・吉林・盛京方面に開き我日本にも通交す。欽茂に至り肅愼の故地に復都し國中に五京を置きて甚強盛なりしが、五代の世に及び契丹の阿保機に滅さる。

第五章　西北諸國の盛衰　波斯・大食の廢興

唐初東突厥の勢強盛にして頻に唐室を輕んぜしも、頡利突利兩可汗相爭ひてより兵勢漸振はず。特に頡利は中華奢侈の風を摸し國用給せずして諸部に徵發を强ゆ。諸部之を怨む。唐李世勣に命じ鐵勒（高車）の薛延陀と東突厥を夾擊せしむ。頡利敗れて擒となり其故地悉く鐵勒諸部の手に歸せり。此時西突厥は達頭可汗の孫射匱玉門關（甘肅省安西州）西の諸國を從へ其弟統葉護波斯を破り羈縻州となし國勢最隆なり。統葉護其諸父に弑せられて西突厥亂る。後沙鉢羅可汗悉く其地を平定し勢再强盛にして屢唐に入寇す。高宗蘇定方等を遣はして沙鉢羅を擒にし濛地崑陵の二都護府を置けり。後西突厥の餘衆等吐蕃に應じて起り屢天山南路の地を擾りしも西紀六百七十九年斐行儉に下され、突厥遂に空し。

鐵勒は則ち高車にして漢の丁零の後漠北に散居して部族甚多し。就中薛延陀・回紇の二部尤強し。回紇は獨樂水上にありて後の所謂回鶻なり。薛延陀其南に居る。唐初薛延陀の夷男（眞珠毘加可汗）回紇の菩薩共に東突厥を滅ぼし雄を漠北に稱す。太宗の末年夷男死し薛延陀亂る。時の回紇部長吐迷度其弊に乗じて之を破り悉く鐵勒の諸部を統ぶ。是に於て其版圖は東室韋より西金山に至り、東突厥の故地を掩有して唐に歸服し、其主は玄宗の册封を受けて懷仁可汗と號し、安・史の亂後唐室の漸く衰ふるに及びては、婚を通じ金帛を收めて其後援をなし、一時頗強盛を極めしも、後漸く衰へて磧西に移りき。

薛延陀

回紇

吐蕃

吐蕃は圖伯特種なり。唐の太宗の世棄宗弄贊其主たり。篤く佛教を信じ佛典を印度に求め、意を政・刑・治術に用ゐると共に地を外に拓き、南阿撒母泥婆羅を征し、東吐谷渾黨項を侵す。時に太宗既に吐谷渾黨項を降して青海一帶の地唐の藩屏たりしかば、吐蕃と兵を交へて之に勝ち、其降和を納れ公主を弄贊に與ふ。吐蕃これより唐の文物制度を摸し、唐は吐蕃によりて中天竺に通ずるを得たり。而も吐蕃の勢益強大にして、東は松・茂二州より西は龜茲・疏勒に抵り、悉く西南地方を併呑して唐の邊境に迫り、代宗の時其兵遂に長安に侵入し、僅に郭子儀の爲に擊卻されしも、高昌・回紇等と連結して屢唐の西陲に寇したりき。

波斯の滅亡

東西兩突厥唐に滅ぼされ天山兩路及中央亞細亞も支那の藩屏となりてより、波斯は僅に東顧の憂を免かれしが、大

食國起りて西境漸く多事となれり。唐の太宗の時、波斯王伊嗣俟（メウヒルト）・連（ヒ）に大食の爲に破られ退きて僅に呼羅珊（ホラサン）を保つ。高宗の世西紀六百六十一年伊嗣俟の子・卑路斯（ペルス）遂に國を以

摩訶末

大食の勃興

て唐に降りサ、ン朝こゝに滅ぶ。唐・波斯都護府を設け卑路斯を以て其都督に任じたれ共、其地は回教徒の掌裡に落ちて大食遂に西方亞細亞に雄視せり。

是より先・陳の宣帝の世・亞剌比亞の默加（メッカ）に摩訶末（マホメッド）出て、自豫言者と號し猶太・基督二教を參酌して新宗教を唱へ、經典を左にし利劍を右にし、干戈を執て教を四方に布く。其繼嗣者哈利發（カリフ）オーマル及び、西・羅馬を侵すと共に東・波斯を破り、其子オスマン（敏密莫末賦）西紀六百五十一年始めて好を唐に通ず。大食國是なり。大食・波斯を滅ぼして更に東に進み唐末の亂に乘じて葱嶺を踰に、于闐を陷れて支那を威壓し、南は又ゐはゞ印度を侵略せり。是に於て中央亞細亞及天山南路に於ける佛教漸次衰微し、摩訶末の新教之に代

はる。』支那に所謂回教是なり。

第六章　漢唐の儒學

前漢の儒學

春秋戰國の世、社會の秩序崩壞して言論の束縛解け、諸子百家の異說雜論紛々として起り、甲論乙駁底止する所を知らず。秦天下を一統して處士學者の橫議を患ひ、書を燔き儒を坑にして黎首を愚にす。漢起りて惠帝挾書の禁を解きしも、黃老申韓の雜說盛にして儒道起らず。文帝に至り頗儒學の絕たるを起すの意ありて、先代の老儒を徵して博士となし、詩書を以て進仕する者漸く多し。景帝其後を承けて亦儒者を優待す。故を以て諸王族にも興學崇儒の徒競ひ起り、楚の元王多く老儒を養ひ其後劉向父子は漢代の大儒となり、河間の獻王は先世の經典を民間に探りて後世經學の材を遺し、魯の恭王は孝經を孔家の壁中に獲たり。武帝の世、衛綰田蚡相次で相となり、共に黃老申韓百家の辭を排して儒術を尊び、公孫弘董仲舒は春秋を以て出身し、大學を興し五經博士を置き、天下靡然として儒學に向ふ。是より學者皆力を六藝の科孔子の學に致し、各一家の說を立て、五經の討議諸傳の論駁盛にして、其弊や己を專にし殘を守り、同門に黨して道眞を妒み、後の朋黨の端緒を啓きたれ共、儒學の根底を確立したるは實に此時に在り。

後漢の儒學

王氏の簒立ありて士太夫の山林丘壑の間に遁るゝ者多かりしが、光武漢室を中興して前代の儒者復出仕し、大學復興る。其都を東に遷すや書籍二千餘輛を舊都より運びた

りといふ。而して學者・古典の意義を講究し註釋を作るもの多く、就中鄭、玄は孟子以後の大儒と稱せられ、其三禮・詩・書・易の註釋最も精細を極めたり。章帝の世・諸儒を會して經書の異同を論じて白虎通を定め、桓帝に到りて大學の學生三萬に超ゑたりき。然も其儒籍に上るものは萬人に過ぎずして、經義漸く研究し盡くして儒風衰へ、詩賦文章大に發達し以て六朝に及べり。殊に後漢は學閥朋黨の爭盛にして、諸儒・王庭に分諍し私里に樹朋し、遂に黨人の禍を來たすに到りぬ。

三國六朝の經學

三國の時魏に王肅出でて簡約華美の學風を起し、鄭玄が敦厚深遠の學說と對立して、南北兩派の學風を留め、何晏出でて、老・莊の意義を以て經書を解釋して西晉清談の基を啓き、吳に虞翻出でて易を註し、蜀に譙周ありて經學を講修せり。兩晉の際に及びては儒學大に衰へて詩賦文章に流れたりしが、胡人は既に久しく中國の文明に浴して實用の學を好み、劉淵は詩・易・尚書を學び、慕容皝は經史を尚び、符堅は大學を起し、姚興は常に經籍を講じたりき。南北朝に至り北方の經學は古義によりて鄭玄の說を奉じ、南方は王肅が說を祖述せしも、一般に文華盛にして實學衰へ、僅に北朝に徐遵明・李鉉等ある耳。

隋唐の儒學

隋の文帝・天下を統一して古典珍籍を民間に蒐輯し、州郡に學校を設け南北兩派の學を併せ取りしかば劉焯・劉絃の徒博覽多識を以て名を成し、龍門の王通・河洛の間に徒を集めて自一家言を爲す。唐に至りては太宗・大に學事を奬勵

し、杜如晦・房玄齢以下十八學士を選拔して經籍を討議せしめ、京師に國子學・大學・弘文館・崇文館等を設け、府・州・縣に各學校を建て秀才・進士等の諸科を以て登庸、法を定め、儒學の盛なる漢・魏・晉を凌駕せり。然れども古來の經義區々紛々適從する所なきを以て、孔穎達・顏師古等命を奉じて五經正義を撰定し、易は王弼の註、書は孔安國の傳・詩は毛萇の傳・禮は鄭玄の註・左傳は杜預の註を取りて諸家の疏を加へしより、經學は所謂訓詁註疏の弊に陷り、學者皆正義の定說を墨守し、たゞ李鼎祚の易に於ける、啖助の春秋に於ける、較・獨得の見あるも、其他に新說を出す者殆ど無く、天寶の乱後・學術愈廢頽し、獨・韓愈の經學者を以て稱せらるゝありしも、高遠なる思想は遂に老・佛の徒に歸したりき。

第七章　文藝

支那古代の文章は語短く意長く簡古雄勁なりしが、周末より秦に及びて漸く華麗に流れ、漢に至りて長足の進歩を爲し司馬相如・司馬遷・楊雄・劉向の四大家を出し、特に賈誼の文に至りては理論精確・筆力雄渾・實に漢代第一たり。而も政學共に尙古の風なれば、文章も多く古文に摸し、楊雄の大玄經の如きは全く易に模倣したりしが、此等の古文に對して淮南王・梁の孝王の如き詞賦・文章を好める諸王が下に王褒・鄒陽・牧乘等の佳麗華美の文行はれ。後漢には班固・蔡邕の徒ありしも、文章は益・纖弱縟麗に流れたり。三國には魏に曹植・王粲・劉楨以下建安の七子出でて輕美纖巧の文を作

六朝の文體

りて天下を風靡し、蜀の諸葛亮が謹嚴眞率の文の如きは甚希なり。六朝に及びては所謂四六駢儷體盛に起る。則晉に陸機・潘岳・張華・陶淵明あり。就中淵明の歸去來賦は南北の絶唱と稱せらる。南北朝は晉に比して稍・遜色あるもなほ宋に謝靈運・范曄・鮑照あり、南齊に謝朓・任昉・孔稚等あり、梁に蕭明太子出でて、文選を撰み、沈約、四聲の音韻を別ち四六體を淑め、庾信の文章は南北に冠たり。纖巧華麗此に到りて極まる。唯・姚思廉・古文を以て其間に名あり。而して衣冠・江南に移りて北朝は文辭の盛莫く、後來江南は詞賦の地となれり。

唐の文章

唐初の文章はなほ六朝の餘風を承けて王勃・楊炯・盧照隣・駱賓王は駢儷文の四大家なりしが、後・張說・蘇頲の二人亦文章を以て名あり。陳子昂出づるに及び文章の衰頽を恢復せんとして果さず。韓愈出でて精嚴雄渾の文を作り八代の衰を興し周漢の醇に復し、柳宗元・亦沈痛雄健の文を以て愈と並稱せられ、李翺・皇甫湜・孫樵等皆愈が系統に出で、杜牧・皮日休・陸龜蒙等と共に古文を以て鳴り、支那文章に一新時期を畫したりき。而も唐に於て最精妙を極めたるものは詩なり。

唐詩

三代の詩は眞率簡朴の風ありしも、周室衰へて天下亂るや慷慨の風を帶び來り、漢に至り五言、七言の詩及び樂器に載せて謠歌する樂府體起れり。曹魏の初・宗室皆詩文に長じ、建安の七子の如きは巧麗綺靡の詩を善くし晉に至りては謝靈運・陶淵明の如き名家出づ。梁の沈約が四聲の別

を論じ音韻の學を捌めてより、詩道大に開け隋を經て唐に至り詩賦其盛を極めたり。唐初沈佺期・宋之問律を作り、尋で陳子昂古詩を作り直に詩經離騷に摸せんことを求めたりしが、李白の豪放飄逸なる、杜子美の沈痛雄健なる詩出でてより唐詩千古に超絶せり。其他王維・孟浩然・韋應物・岑參・高適・柳子厚・白居易等の名家皆一方に雄視し、盛・中二唐の詩壇に雄飛す。杜牧・李商隱・溫廷均・韓偓等は何れも晩唐の詩人なりき。而して唐の衰ふるや詩も亦從て衰へたり。

第八章　佛教・道教

魏・晉・南北朝の佛教

漢代に東傳せし佛教は魏・晉以後黃・老の學の流行に伴ひ其旨義の稍相似たるを以て漸次勢力を得來り、一方には印度及中央亞細亞の佛教徒の或は天山南路に由り或は南海諸國を經て來るもの頗多く、佛圖澄(ブッホーチンガ)・鳩摩羅什・菩提達磨等何れも皆身を宣教譯經に委ねて佛教の傳播を圖り、一方には趙の石勒・秦の符堅・後秦姚の興・宋の文帝・梁の武帝・後魏の宣武帝等歷代の帝王多く佛教に歸依して有力なる保護を與へたり。是に於て佛教益流傳弘通

サンスクリット文字

ईश्वर इत्थं जगददयत यत् स्वमद्वितीयं
तनयं प्राददात् यतो यः कश्चित् तस्मिन्
विश्वसिष्यति सोऽविनाश्यः सन् अनन्तायुः

パリ文字

ကသ္မာတံသဒ္ဒဟန္တိ သဗ္ဗေ အဝိနာသေတွာ
အနုတ္တိဖြစ်တုံလသိတို ဒေဝေါ သကေကဖြာတ
ပုတ္တံ ဒတွာ လောကံစွေ့ကပေမသိ။

西藏文字

དཀོན་མཆོག་གིས་ཉིད་ཀྱི་སྲས་གཅིག་
པོ་བྱིན་པ་ཙམ་དུ་འཛིག་རྟེན་ལ་བྱམས་
པ་མཛད་པས། དེ་ལ་དད་པ་ཐམས་ཅད་

唐の佛教

して西の方印度に法を求むる者尠からず。就中東晉の末世には法顯印度に入り錫蘭に赴き、後魏の末年には宋雲・惠生梵經を北印度に求めき。而して佛教の隆盛は分派を生じ、宋朝には毗曇・律・成實・三論・涅槃の諸宗起り、梁朝には地論・淨土・禪入り、陳・隋には華嚴・天台・攝論の三宗出で、天台の智顗・禪の慧可・三論の吉藏・華嚴の杜順・涅槃の慧遠等碩學高德の名僧智識相踵で出づ。

唐朝に於ては法藏・華嚴宗を擴張し、玄奘・慈恩・新に法相宗を開き、善無畏・金剛智・不空は眞言秘密の法を傳へ、律・三論・淨土・禪・天台と通じて所謂佛教の八宗を爲す。就中玄奘が十七年の艱苦を嘗め葱嶺を超えて印度に入り百餘國を歴て遍く名師・聖跡を探り西紀六百四十九年六百餘部の經典を

齎して國に歸り新譯佛經を成しゝは實に教界の偉績なり。後・義淨も亦經典を印度に求め卅餘國に遊び二十五年を經西紀六百九十五年四百部の經を得て歸れり。是より佛像塔堂の建設益多く、僧尼の數愈滋く、文宗の世には寺四萬・僧尼七十餘萬人に達し、佛教の隆盛こゝに極まりしが、武宗立つに及び厚く道教を信じ大に佛徒を虐遇し寺院を毀ち僧尼を追ふ。此より先南北朝の時後魏の太武帝北周の武帝共に佛徒を虐遇し、此より後周の世宗大に佛教を抑壓せしかば、武宗の厄と通じて佛教三武一宗の難といへり。

莊・列二子は老子を祖述し且神仙を說くこと多きを以て、後漢の末張陵・遂に黃・老の道に托して神仙の術を說き初て道書を作り、其孫魯は蜀に據り符水・禁厭を以て此道を擴む。

晋の時葛洪出で神仙傳・抱扑子等道書に類するものを著はし、尋で南齊に顧歡・梁に陶弘景ありて皆道教を唱ふ。後魏は太祖仙人博士を置き、明元帝は道士冠謙之を尊信し天師道場を設け、太武帝は謙之に聽き悉く沙門を誅戮し、道・佛の二教遂に頡頏衝突せり。周の武帝が道士衛之嵩を信用するや二教また抗爭せしが、唐・天下を得て老子の姓李にして國姓と同じきを以て、道士・附會して老子を國祖となし、廟を造り尊號を上り、道德經を天下に頒ち、崇玄館に道學を講じ、道士は往々高位達官を得、武宗の時に及び道教遂に佛教を壓倒し去れり。

第九章　祇教・景教の東流　南海の貿易

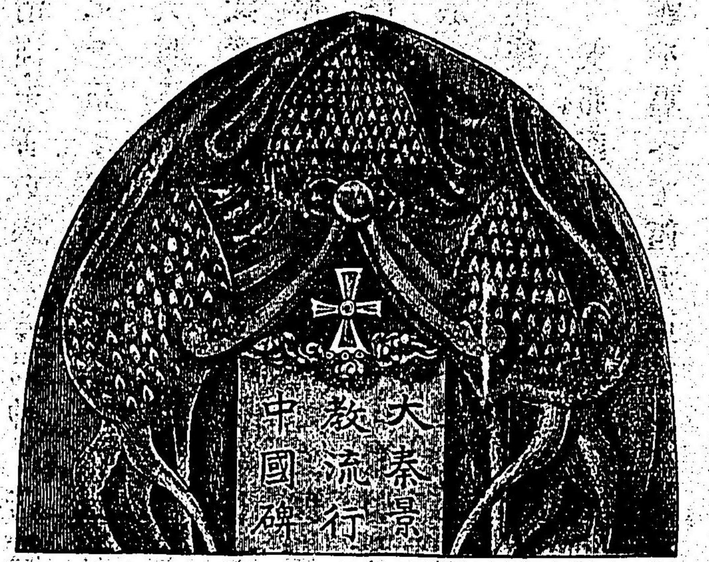
祇教

太古バクトリアにゾロアスタなる者出で一宗教を創め、清淨・至善の本たる陽神と汚穢至惡の源たる陰神とを立て、火を以て陽神を表し之を崇拜せしむ。拜火教是なり。又・天日を拜するが故に祇教といふ。其教・波斯に行はれしが、大食・波斯を滅ぼして祇教徒を虐待刻遇せしかば、其徒東に奔り其教・葱嶺を超ゑて支那に入る。唐の太宗爲に祇寺を長安に建て、祇正以下の教職を置きて其布教を許す。後・玄宗の世・一ゞび之を排斥せしも、なほ唐一代は盛に行はれしが、其後に至りては遂に廢れて復行はれず。

景教

支那南北朝の初期に當り・東羅馬の基督教徒ネストル新義を唱へて西方亞細亞に謫せられ、波斯王の尊信を得て其教を布く。西紀六百三十六年波斯人阿羅本（オロパン）・其經典を齎し

て長安に至る。唐の太宗・房玄齢をして之を迎へしめ、其教義の光輝發揚の義をとりて景教と名け、太秦寺を造り經を譯し僧を度して之を信ず。高宗も亦諸州に景寺を置き、郭子儀の如きも之に歸依して地を捨て寺を創むるに至り、景教大に流行し、德宗の時・長安の太秦寺の僧・景淨・太秦景教流行中國碑を建つ。然るに武宗・位に即き道教を尊信し他の



景教の碑

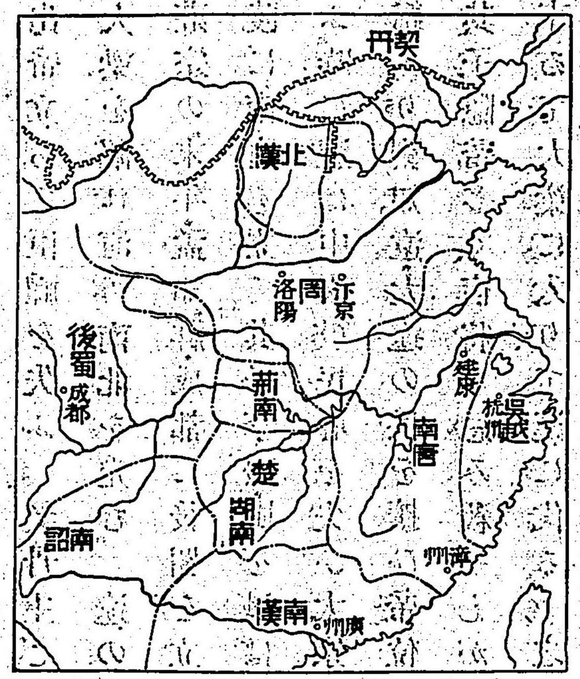
諸宗教を禁遏するに及び、景教も亦其厄に遭ふ。後・宣宗の世・其禁を解かれしも漸く衰微して遂に廢絶に歸せり。

後漢の桓帝の世・太秦始めて支那に通じ、三國・司馬晋の際・日南・交趾は東西貿易の地となりしが、晋室衰へて中國亂れ、賄賂重稅行はれて往來杜絶し、交易一時衰微せり。而も佛教の東漸と共に支那南海の海運發達し、瓜哇・蘇馬搭剌より錫蘭に至る航路は支那人の手に歸せしかば、隋唐の際に及びて南海貿易の廢絶を恢復し、其商船は更に進みて西・印度海岸に沿ふて波斯灣に入り、遙に西して紅海灣頭阿丁（アデン）に達せしが、此時大食・波斯に代りて東方の航路を擴張し、支那南海に通商し、廣東・廣泉・福建・杭江・浙諸州の沿海に至る阿剌比亞人・萬を以て數ふ可く、悉く亞細亞南海の航海權を專有せり。唐・

乃提舉市舶を南海の諸港に置き、海關稅を徵して富源を作り、南海の貿易頗盛大なり。然も其後唐室は季運に向ひ內亂相踵ぎて起り、太食も國勢漸く振はずなりゆきて、東西の交通も次第に稀に、貿易も從つて廢頽するに到れり。

第十章　五代　宋の初世

朱全忠已に唐室を簒ふて大梁（河南省開封府）に帝を稱せしも、其地は僅に黃河沿岸の一片土に過ぎずして、天下は吳・楚・吳越・閩・南漢・南平・蜀・岐・燕・晉等の諸國に分裂せり。就中晉王李克用は舊怨を抱き、屢梁を侵し、其子存勗嗣立して先づ燕を滅ぼし勢に乘じて大梁を陷れ全忠の子末帝を降し洛陽に帝位に上る。是を後唐の莊宗となす。時に西紀九百二十三なり。莊宗位に卽きて岐を降し蜀を併せ河の南北・關中・四川を掩有し、吳・楚・吳越の朝貢を受け、漸く驕恣にして藩鎭將士の怨望を買ひ、遂に反者の手に斃る。明帝を經て閔帝に至り李從珂帝を逐ひて自立し、石敬塘を晉陽に圍む。國宗敬塘契丹の援を得て唐兵を破り西紀九百三十六年洛陽を陷れて太梁に卽位す。後晉の高祖是なり。



晉の起るは主として契丹の力に依るを以て、高祖東北十六州を割きて之に酬い毎歳金帛三十萬を贈りて臣と稱す。出帝立ちて臣禮を失ふ。契丹主これを怒り大舉南下して大梁を陷れ河の南北を定む。遼の太宗是なり。先是唐の莊宗の末年孟知祥成都に後蜀を立つ。此に至りて李昪金陵に南唐を立て其子李璟閩を滅ぼし楚地を略して北に向ふ。時に遼は中國の民心を失ひ太宗の子世宗臨潢（内蒙古巴林）に歸へり劉知遠大遼の兵を攘ひ帝位に即きて漢高祖と稱ふ。其子隱帝多く宿將を忌み殺せしかば鄴都の鎭將郭威衆を率ゐて大梁に入りて漢に代る。之を後周の太祖となす、隱帝の叔父劉崇河東に北漢國を立て、遼南唐後蜀と連和して周に當る。「周の世宗は太祖の子にして英資大略あり、北漢

を破り後蜀を略し、南唐を伐ち北遼を征し、勢に乘じて天下を統一せんとせしが病んで崩ず。子恭帝立ちて將士宿將趙匡胤を擁立して周の禪を受けしむ。宋太祖是なり、唐末以來群雄帝王を稱する者多し。就中梁唐晉漢周の五朝は中原に隆替繼承せしを以て史に五代と稱す。」

宋の太祖は西紀九百六十年を以て帝位に即き宰相趙普の策を用ゐ宿將功臣に諭して節度使を罷めしめ、文臣を以て之に補し州郡に通判を置きて、武臣民政の權を抑へ、各地に運轉使を設けて地方の財政を掌らしめ、唐末以來藩鎭跋扈の勢を削除し、諸道の精兵を選びて禁軍に補し、中央地方の兵數を相當らしめ、民治兵馬財政の三權を收めて內治の革新を爲せり。然る後外不庭を討じ、南唐荊南後蜀南漢吳

越の諸國を討滅して悉く南方の地を定む。而も北方には猶北漢及遼あり。太祖崩じて太宗立ち、北漢を滅ぼして天下を統一せり。太宗太平興國四年西紀九百七十九年皇紀千六百三十九年

宋の太祖

遼・宋の交

南北朝の初潢河西喇木倫附近に契丹あり。五代の初耶律阿保機出て其諸部を併せて帝と號し、北室韋・女眞を侵し、西・回紇・吐谷渾・黨項を降し、東・渤海國を滅ぼし、吐蕃・大食・新羅の貢を受けて勢強大なり。子太宗立ちて支那を侵略し遼と號す。太宗の後世宗穆宗を經て景宗に至り、宋の太宗の北征軍を高梁河北京の西に破り進んで瓦橋關直隸省保定府を圍みたり。

宋・夏の關係

是より後兩國の平和破れて涿・朔・深・德の諸州を爭ひ、河北の地南北交戰の區となること二十五年、遼兵常に強くして永く宋の外患たり。景宗の子聖宗立ちて耶律休哥專ら宋に當り宋將曹彬を岐溝關直隸省順天府に破り、高麗・女眞を威服し、尋で聖宗大舉南下して澶州直隸省大名府を圍む。宋の丞相寇準眞宗を奉じて親征し、遂に和を講じて宋遼兄弟と稱し歲幣數十萬を遼に贈ることを約して各兵を收めたり。時は西紀千四年なり。

唐末黃巢の亂より黨項の酋拓跋功を以て夏國公に封ぜられ其子孫鄂爾多斯の南に國を立つ。宋の太宗の時姓を趙と賜ふ。眞宗崩じて仁宗位を承ぐるや、夏の趙天昊・囘紇を伐ちて河西を取り、興慶甘肅省寧夏府に都して大夏皇帝と號し宋の邊境に逼る。仁宗乃夏辣・韓琦・范子淹等を遣りて之を防

が之め、豐延渭の諸州は長く兵馬の區となれり。時に遼の聖宗已に崩じ興宗嗣ぎ宋の歲幣銀帛を得て宋夏の間を調停し、夏は宋より歲幣及封册を受け臣禮を執るを約して和を講ぜり。（宗慶曆三年西紀千〇四千七百三年皇紀千）

第十一章　神宗の新法、哲宗の改復　徽宗の紹述

神宗の治世

王安石の新法

「仁宗崩じて嗣なく、太宗の曾孫英宗立つ。「英宗の子神宗、位に即くや年少氣鋭、國威を外に張らんと欲せしも、太宗以來歷世、外國に屈辱せられ、贈與の歲幣多く財政頗困弊を極めしかば、王安石を擧げて富國强兵の策を講ぜしむ。「安石よりて青苗、募役、市易、保甲、保馬等の諸新法を制す。「保甲は十家三保の民兵制度、保馬は官馬貸與の法、募役は服役の義務に代ゆるに稅を以てし無職の民を募りて役に充つる法、市易は市場に賣れざる物品を官にて購求交易し資金を商賈に貸して利を納むる法、青苗は春、官錢を農民に貸與し秋に至りて二割或は三割の息を附して還納せしむる法なり。「其目的、國庫充實に在れば人民は之を喜ばず。「且つ歐陽修、司馬光以下の朝臣は祖宗の遺制に違ふを難じ、程顥、程頤等の學者は先王の政を壞るを議し、皆共に極力新法を排斥す。「而して安石は剛愎固執にして悉く此等の保守派を退け、韓絳、呂惠卿と共に新法を斷行せり。」

哲宗の時代

元祐の更代

「神宗崩じ子哲宗嗣ぎて、年尙幼なりしかば高太后、朝に臨んで政を攝す。「后、新法の弊害を察し司馬光を登庸して丞

相となし、呂公著を力を合せて悉く新法を罷廢せしめ、呂惠卿・蔡確等を貶黜し、文彦博・程頤・蘇軾等の舊法黨を任用す。之を元祐の更代といひ、新舊法黨の爭に於ける第一變となし、太后を稱して女中の堯舜といへり。然るに幾もなくして司馬光薨じ、高太后も尋ぎて崩じ、朝廷復黨爭起り、朝臣は洛・川・朔の三黨に分裂して相凌軋す。章惇・呂惠卿・蔡京・蔡卞等の新法黨其機に乘じて再び黨勢を恢復し、漸次新法を復舊し、悉く元祐の諸臣を貶竄して司馬光・呂公著等の謚號を追奪し、政局ここに再變せり。世稱して紹聖の紹述といふ。

紹聖の紹述

哲宗崩じて徽宗位を承くるや、向太后朝に臨み、韓琦の子忠彦及曾布等を用ゐ、章惇・蔡京等の新法黨を罷め、司馬光等の官を追復し、元祐・紹聖の二政を折衷し大公至正を以て國政に當らんと誓ひ年號を建中靖國と改む。是を政局の第三轉となす。然れども曾布は章惇の下に出でたれば、久しからずして韓忠彦と隙を生じ、徽宗の意を迎へて紹述に傾き、漸次元祐舊法の黨を排除し蔡京を勸む。京用ゐられて忠彦と布と共に罷められ、京は新法黨の首領として相位に上り、紹述に托して天子を箝制し、王安石を追尊して孔子に配享し、司馬光以下元祐の諸臣を姦黨と呼び、端禮門外に黨人の碑を立て舊法黨の子弟の入京を禁止せり。此を政局の第四變となす。爾後蔡京長く相位を占め、紹述の名に假托して益財利の政を行ひ、擅に官制を革め子弟緣貲を引きて朝に列し權勢一世に振ひ、帝に勸むるに奢侈を以て頻に土木を興し奇珍を致し、黎民の疾苦を顧みず。是

建中靖國

蔡京

を以て宋の國運日に非にして、遂に金兵の南進に遭ひて南渡の已むを得ざるに到れり。

第十二章　遼・金の興廢

遼の衰運

遼は聖宗・宋の太宗を屈して歲幣を納れしめて最盛なりしが、子興宗嗣立して善く先世の遺業を守り猶國威を墜さず。興宗崩じ道宗立ち再宋と境界を議定し新に百餘里の地を收めて國威益振ひたりしも、耶律乙辛を親任してより賢良・朝を去り羈屬漸く畔き、黨項・命を奉ぜず西夏・邊に寇し、國運遂に傾く。道宗の孫・天祚帝・其後を承け淫虐にして國政益紊る。此時に當り女眞の阿骨打・黑龍江上より起り連に遼兵を破り天祚帝を混同江（松花江）に擊破せり。

金の勃興

阿骨打の先は黑龍江上の黑水靺鞨なり。渤海國の盛なるや黑水靺鞨は之に屬隸せしが、遼・祖・渤海を滅ぼすに及びて混同江（松花江）南に在る者は遼に屬して熟女眞といひ、江北の者は唯其羈縻を受け版籍に入らずして生女眞といへり。宋の仁宗の頃、按出虎水（阿勒楚喀河）附近の生女眞に完顏部長烏古廼なる者あり、遼の生女眞節度使となる。其孫・阿骨打に至り、生女眞を以て遼に叛き、混同江附近の諸部を定め西紀千百十五年帝位に登る。金の太祖・是なり。遼の天祚帝親ら金を征して混同江に至る。太祖・擊ちて之を破り熟女眞を降し遼の東京（東平府）を陷れ進みて上京（臨潢府）に逼る。

遼の滅亡

南宋の蔡京・邊功を立て徽宗の信任を厚くせんと欲し、連に外征の師を出す。童貫は吐蕃を擊ちし勢に乘じ遼の亡

臣・馬植の言に聽き、金と遼を夾擊するの議を建つ。徽宗其議を用ゐ、使節を金に遣はして好を通じ、宋は南より遼の南京を取り、金は北より其中京を陷れて其地を分ち、從來遼に贈りし歲幣を金に與へんことを約す。金の太祖乃約に從ひ兵を進めて遼の上京及び中京（大定府）を取り、天祚帝を逐ふに遂に西京（大同府）を陷れたり。時に宋の童貫・蔡攸等大軍を率ゐて北進せしも、屢遼軍に破られて南京を下す能はず、乃密に援を金に請ふ。太祖請に應じ直に居庸關（直隸省順天府）より入りて南京（燕京）を陷れしが、宋の出師の期を失ひ且南京を下す能はざりしを以て前約を渝へんことを求む。宋其意に從ひ既定の歲幣の外別に錢百萬緡・糧廿萬を增すを約し僅に南京及其附近の六州を得たり。翌年金の太祖殂し弟太宗立ちて陰山以南の地を西夏に割きて遼の天祚帝を納るゝ勿らしめ西の方之を逐ふ。遼帝適歸する所を失ひ黨項に奔らんとし途に金兵に獲られ遼遂に滅ぶ。時に西紀千百二十五年（宋徽宗宣和七年）なり。

第十三章　宋・金の交渉

遼既に滅びて金宋を輕んじ頻に南下の策を講じ、宋が金の亡將遼の遺臣を納れ且所約の糧を輸せざるを名とし、太宗遂に皇族粘沒喝・斡離不を將ゐ宋を伐ち汴京を圍まむ。徽宗急に位を避けて勤王の師を徵し欽宗天位を承けて都を南に遷し金人を避けんとす。李綱之を諫め汴京を死守し主戰說を唱へしも滿朝皆講和の利をいふ。欽宗

金・宋を侵す

宋室の南渡

遂に三鎮の地を割き犒師料を輸せんことを約し金兵を退け、李綱等の言を用ゐずして勤王の師を罷む。而して三鎮の地・金に入らず。太宗・大に怒りて復南征の師を遣り汴京を陷れ宋帝及上皇を執へて北に歸る。宋には西紀千百二十七年高宗・位に即き遂に都を楊州（江蘇省楊州府）に遷し金人の鋒を避けたり。之を南宋となす。是に於て河東・河北・河南・關中・江淮の地・悉く折けて金に入り。金の太宗は婁室・兀朮・粘没喝を遣りて汴京を陷れ、宋の降臣劉豫を立てゝ齊帝となして漢人の心を懷け、長驅して楊州に至る。高宗・難を杭州（浙江省杭州府）に避け、尋で溫州（浙江省溫州府）に奔る。時に岳飛・韓世忠等よく金人を防ぎ、且太宗の疾篤きを以て金兵引き還りしかば、高宗都を杭州に奠む。實に西紀千百三十四年なり。時に

秦檜

金は太宗殂し從孫・熙宗嗣立し、宗族蒲魯虎・撻懶を粘没喝に代りて事を用ゆ。宋の秦檜・撻懶と善し。高宗の相となり南北講和の利を唱ふ。時に熙宗は蒲魯虎・撻懶が宋に通ずるを疑ひて之を誅し、兀朮をして南伐せしむ。宋將岳飛之を破り、勝に乘じて河北の地を定めんとす。秦檜・和議を固持し、東・淮水より西・大散關（陝西省鳳翔府）を以て兩國の界となし、宋は金の封冊を受け歲貢を納むるを條件として和を講じ、力めて反對黨を抑壓し、文字の獄を起して學者の議を塞ぎ、諸將を誣貶して兵權を奪へり。

金・宋の和

時に金の宗室・廸古乃・熙宗を弑して位を簒ひ、都を燕京に移して五京を置き、親・六十萬の大軍を帥ゐて南下せんとし其下に殺さる。從弟烏祿位に即き南伐の兵を罷め、使を

宋に遣はして和を求む。世宗是なり。時に宋は孝宗位に在りて鋭意恢復を圖り北伐の師を出せしも、其利なきを見て金の請に應じ、宋の歲貢の額を減じ、君臣の禮を叔姪の禮に代へ、前約の境界によりて和を講ず。此時金は東高麗を威服し、西夏を懷け、南漢淮より北朐盧河に至り、東亞の最大強國となり、世宗は女眞の國風を保守し奢侈文弱に流るゝを制し、金室の盛其極に達せり。

金の極盛

金の世宗と宋の孝宗は年を同くして崩じ、金には章宗嗣立して國勢漸く衰へ、宋には光宗位に即きて國人服せず。韓侂胄光宗の子寧宗を擁立し、朱儒朱熹を逐ひ宰相趙汝愚を竄して、內政を專にし、金の國政紊れたるに乘じ大功を立てんと欲し、遂に前約に背きて北伐す。金章宗邀擊して大に之を破り、勝に乘じて南に下る。寧宗、大に懼れ西紀千二百八年韓侂胄の首を金に送り、歲幣の額を增し犒師銀を贈り、叔姪の禮を改めて伯姪の禮となして和を講じたり。是宋・金第五回の講和にして是時蒙古勃興して金に逼れり。

韓侂胄の北伐

第十四章　宋代の儒學・文藝

儒學は漢・唐の代を通じて各經皆博士の職ありて成說を傳承し新論を排斥せしが、其發達は遂に訓詁註疏の外に出づるを能はざりしに、宋に到りて其風一變して理學起れり。是蓋佛敎遍く天下に行はれて、士大夫の之を研鑽する者多きより、不知不識の間に幽遠なる哲理を儒學の上に求むるより起れり。其所謂理學の鼻祖は周敦頤にして、濂溪

宋代の儒學・文藝

朱熹と陸象山

先生と號し、深く易理を窮め、大極圖說・通書等を著はし、大に哲理を述ぶ。濂溪の門下より二程出づ。明道先生程顥は定性書を著はし、伊川先生程頤は易・春秋の傳を著はせり。之と前後して河南に邵雍出で、易學數理に通曉し、康節先生と稱ふ。また關中の張載は橫渠先生と稱し、二程と名を同くして門人頗る多し。南宋の高宗の時、朱熹閩中に出で、此等諸儒の所說を集輯參酌して宋學を大成す。後の儒學をいふ者皆範を此に取り、朱子學は進士登庸にも用ゐらるゝに至り、其著書には易本義・詩集傳・四書集註・小學・近思錄・通鑑綱目等あり。宋末に至りて眞德秀出で再び朱熹の學說を唱道す。當時又陸九淵・象山と號するものあり。德行を重んじ朱熹の博學を先となせるに對峙頡頏して互に相下らず。又司馬光は資治通鑑を撰して治亂興亡の跡をあきらめ、馬端臨は文獻通考を著して制度典章の沿革を記す。共に宋代有名の史家なり。

文章

唐は詩に李・杜あり文に韓・柳ありて文藝歷代に冠絕し、五代に至りては徐鉉・杜荀鶴の徒あるもまた唐に比す可くもあらず。宋に至りて詩は到底唐に及ばざるも、文章は殆唐に凌駕せんとするの盛況を呈せり。蓋其初柳開・穆脩等が古文は未だ見るに足らざりしも、歐陽修出でて文は韓愈の壘を磨し宋代の文章に一生面を開きぬ。之に次ぎて蘇洵・蘇軾・蘇轍・曾鞏・王安石等の諸大家出で、就中蘇軾は東坡と號し文章を以て歐陽修と並べ稱せられ、後世唐・宋の文を論ずるもの皆韓・柳・歐・蘇を推重せり。東坡また非凡の詩才を具へ

て梅聖俞・黄魯直・王安石等と宋詩の大家たり。宋室南渡の後は理性の學盛に起りて詩賦文章漸く衰へたれども、尚李綱・王十朋・葉適・陳亮・陸游等の名家尠からず。殉國の名士文天祥の如きもまた詩文を善くしたりき。

第十五章　宋代の高麗

唐初新羅は朝鮮半島を統一し、聖德・景德の二明君出でて國運太昌なりしが、後漸く衰へ、唐末・僖宗の頃に及びて眞聖女王位に在り。佞嬖を寵用し國政紊れ、盜賊蜂起す。甄萱は完山（全羅道全州府）に據りて後百濟を建て、弓裔は鐵圓（江原道鐵原府）に據りて國を泰封と號す。已にして弓裔の將王建軍功を以て衆心を收攬し松嶽（京畿道開城府）に據りて高麗國を建て、弓裔を

新羅の衰運

逐ひて悉く其地を併せ、契丹に逐はれし勃海の遺民を納れ、新羅・後百濟と新に三國鼎立の形を爲す。高麗の太祖是なり。三國の中・後百濟最强大にして遂に新羅を攻めて其國都を陷れしかば、新羅の敬順王出でて高麗に降る。高麗の太祖之を納れ後百濟と戰ひて其主を降し西紀九百三十七年を以て遂に朝鮮半島を一統せり。時に後晋の高祖・梁に代りて位に即きしかば高麗使を遣はして之に通じ爾後五代の正朔を奉じて宋朝に及ぶ。

高麗の一統

太祖の孫成宗の世・遼に聖宗出で高麗の宋に通ずるを怒りて來り伐つ。成宗・援を宋に請ひしも宋應ぜざりしかば遂に宋と絶ちて遼の正朔を奉じ封冊を受けたり。成宗殂し穆宗立ちしが康兆・穆宗を弑して顯宗を立つ。遼の聖宗・

遼・高麗の關係

問罪の師を發し自兵を提げて來り兆を誅し國都開京（京畿道開城府）を陷れ顯宗を奔らす。顯宗罪を謝し臣と稱せんと乞ふ。聖宗乃ち顯宗をして親入朝せしめんとせしに從はず。更に六州の地を索めしに顯宗復之を拒む。遼兵連に入寇し顯宗も亦屢之を破りたれ共其遂に對抗す可らざるを知り貢を納れて臣と稱せり。（遼聖宗開泰八年西紀千〇十九年）後德宗仁宗等皆竊に宋に通ずと雖も常に遼の封冊を受けて忠誠の意を表して國運を保持せしが、仁宗の時生女眞より金起り、遼を滅ぼし宋を逐ひ其勢强大となりしかば、仁宗は表を捧げて藩と稱し、遼に事へし禮を以て金に盡くせり。仁宗殂して毅宗立ち、武臣亂を作して王を弑し、其弟明宗を擁立して金に告げしに金之に封冊を授く。於是高麗は權臣威福を擅にして

金・高麗の關係

屢廢立を謀り國勢漸く衰ふ。

第十六章　大食國の分裂　印度に於ける回教國　西遼の建國

唐の中世・大食の哈利發アルマンソル始めて都を八吉打（バグダット）に奠む。其後嗣者頻に學術を奬勵して文化頗開けしが、其弊文弱に流れ所在の豪族兵・政の權を私し、自・樓里丹（ダン）と號して獨立の勢を爲せり。此時豪族サマンの後イスマイル都を蒲華（ブハラ）に奠む。是より

大食國の貨幣

大食國の分裂、印度に於ける回教國、西遼の建國

シリア文字

亞拉比亞文字

لأنه هكذا أحب الله العالم حتى بذل ابنه
الوحيد لكي لا يهلك كل من يؤمن به بل
تكون له الحيوة الأبدية.

波斯文字

زیرا که خدا آمد جهان را دوست داشت
که فرزند یگانه خود را ارزانی فرمود تا که
هر کس که بر او ایمان آورد هلاک نشود

の別喇薩軍に移り哈剌魯部を率ゐて中央亞細亞を侵す。適蒲華のイスマイル沒せしかば、回鶻のイレク汗其機に乘じてサマン家を滅ぼし天山の東端より嬀水に亙る大領土を掩有す。而してサマン家の臣突厥種セブク・テギンは哥

一六八

り先回鶻は吐蕃に破られ黠戛斯に逐はれ、一部は河西に奔り西夏に投ぜしが、一部は高昌吐魯番に奔り尋で吹河上

印度の形勢

疾寧可不里に據り、其子マームード八は遂にサマン家に代りて樓里丹を稱し、嬀水以南波斯灣に至る地を統領し、次で兵を印度に出せり。

梁の頃北印度に毗訖羅摩迭多出で西北中三印度を併せ、隋唐の際戶羅迭多戒日王曲女城に據りて全印度に號令せしが、其殂落するや諸侯四方に割據して相爭ふ。時に大食波斯を滅ぼし屢印度を侵しパンジャブを略し、西印度より羅侍布土族起り溫都教を叛めて佛教徒と爭ひ、五代の末に至りて國力漸く凋弊せり。こゝに至り西紀千二年哥疾寧のマームード八告打の哈利發の名を借りて兵を印度に用ゐる諸侯分爭の弊に乘ず。拉保爾のザイパル王羅侍布土のビジライ王等諸侯を糾合して之に當る。マームードは前後二

十五年間に印度に侵入すること十七回、至る處伽藍を壞り佛像を毀ち、南・グジャラットに抵り東・カノージを極め、信度・恒河の流域を擧げて回教國を建てたりき。[illegible]

セルヂュク朝

先是突厥の欽察に逐はれて蒲華附近に移住せる中にセルヂュクあり。回鶻・哈剌魯が中央亞細亞を擾すに乘じ漸く領土を擴む。其孫トグルル遂に哥疾寧の樓里丹を破り保羅珊の地を得て都を尼沙不耳に奠め、八吉打の哈利發より回教保護者の號を得たり時に西紀千三十七年なり從子アルプ・アルスラン立ちて東邏馬の兵を破り、アルメニアを征し、其子メリク・シャは東・尋思罕サマルカンドを取りて合失合兒に及び西・亞剌比亞に抵りシリア埃及を侵して大版圖を掩有して國運昌隆を極めたりしが、其歿するに及び諸子・諸臣・其地を分割して勢漸く微なり。

西遼の建國

遼の滅ぶや宗室・耶律大石・餘衆二千を以て西走し合兒剌を伐ち回鶻を併せ、中央亞細亞に侵入して尋思罕を降し、黑契丹の濶兒汗を稱す。所謂西遼の德宗是なり。セルヂュクのメリク・シャの子サンヂャル來り伐つ。德宗之を嬀水（阿母河）に擊破し、次で花剌子模を降し、西はアラル海より東は西夏に及べる大版圖を有し、中央亞細亞の最強國となれり。西紀千百三十六年德宗殂落し子仁宗を歷て孫直魯克に至り乃滿・花剌子模の厄あり。

第四編

第一章　蒙古の勃興　元太祖の西征

蒙古の勃興

蒙古は斡難・怯魯連二水の源・不而罕山附近に游牧せる室韋の一部にして、世々遼・金に隷屬せり。其部長合不勒始め

金の滅亡

蒙古西夏を降す

て蒙輔國王となり、孫・也速該に至り近傍の諸部落を併せたり。也速該・塔々兒に殺され其長子鐵木眞・金を助けて塔々兒を伐ち功を以て察兀禿魯招討使となる。尋で鐵木眞は克烈部長汪罕と共に薛靈格河畔の蔑里吉を破り、又貝加爾湖畔の泰赤烏・興安嶺下の塔々兒を降し汪罕を滅ぼす。乃滿下金山王太陽罕・以上諸部の餘衆を誘ふて蒙古を伐ちて杭海山に破れ内外蒙古の地殆・鐵木眞に歸せり。鐵木眞乃西紀千百六年を以て斡難河源に諸部の酋長を會し汗の位に即き、成吉思汗と號す。強者の義なり。彼時は汗年五十三・宋の寧宗の世に當れり。

西夏は李元昊の子秉常・秉常の子乾順・常に宋と爭ひ、乾順の子仁孝・金の世宗の助を借りて内亂を鎮め金に服す。仁

孝の子純祐に至り從弟安全に弑せらる。成吉思汗此内亂に乘じて西夏を伐たんとす。乃蠻の太陽罕の子屈出律は蔑里吉の酋脫脫と餘衆を聚めて恢復を圖り蒙古を伐つ。成吉思汗よりて先づ之を擊破し、脫脫を殺し屈出律を走らし、次で貝加爾湖西の斡亦剌部を降し、兵を南に轉じて西夏に逼る。西夏主李安全遂に女を納れて降を請ふ。回鶻・哈剌魯も亦風を望んで蒙古に降る。成吉思汗是に於て全力を擧げて金に向へり。

金の衰運

此時金主章宗已に殂し其叔父允濟位に在れども柔弱にして士心を失ふ。成吉思汗之に乘じ三道より兵を進め、西京（大同府）を陷れ河東・河北・遼西の州縣を拔き燕京に逼る。金の大臣等允濟を弑し章宗の庶兄宣宗を立て公主・金帛を納れて和を求む。成吉思汗引き還へる。金は燕京の蒙古に近きを憂ひ都を汴京に遷す。成吉思汗其疑心あるを怒り復南下して燕京を陷れ、更に西より汴京附近を剽略せり。是に至りて金は僅に北眞定を保ち東河を阻て西潼關を扼して自衛り、蒙古は殆黃河以北の地を戡定したり。

西遼の滅亡

是より先乃蠻の屈出律は西遼に奔り、次で花剌子模王と相ヒて内外相應じて西遼を滅ぼし、西爾河を境として其地を分つ。成吉思汗將哲別を遣り伐つて之を殺さしめ、悉く西遼の故地を收め、境を花剌子模に接す。時にゴリヘの東南にシハブヂン興起して哥疾寧家に代り、阿富汗斯坦・北印度を併し進んで中印度を略せんとして恒河に沒す。花剌子模王ムハメッド此機に乘じて直に其阿富汗斯坦を奪ひ、

成吉思汗の西征

更に西に進みて八吉打の哈利發を廢立せんとせし、功なくして還り兵氣沮喪し將士命を奉ぜず。適、蒙古の隊商百餘人、花剌子模の訛打剌城に殺され其問罪の使者も亦殺さる。成吉思汗大に怒り四子朮赤・察合臺・阿窩臺・拖雷と共に西征し、阿力麻里（伊犁曲城の附近）を經、忽章河（西爾河）を渡り、花剌子模の國都尋思罕を陷る。王ムハムメッド呼羅珊に遁れしも、蒙古の將速不臺・哲別に追躡せられ窮蹙して裏海の六孤島に竄死す時に西紀千二百二十年なり。王ムハムメッドの長子札蘭丁、兵を哥疾寧に募り恢復を圖りしが、成吉思汗の疾驅來り伐つに及び、信度河を超えて遁る。速不臺・哲別の二將はムハムメッドを追ひて裏海の西岸に至り欽察が曾て蔑里吉を納れしを怒り太和嶺（高加索山）を踰えて之を伐つ。南阿羅思（魯西亞）の諸侯幾富の太公密赤思老等、欽察と應援して蒙古を阿里加河畔（阿速海附近）に邀ふ。蒙古の二將大に之を破り其地を掠略し西紀千二百二十二年東に歸る。成吉思汗の西征の間に宋・金・西夏は遂に相和するに至りしが、連年の攻戰に國力頗る疲弊せしかば、汗の西より歸るや先づ西夏を伐ちて其主李睍を降し、更に金を侵さんとし六盤山（甘肅省鞏昌府）に至りて病沒す。年七十三。之を太祖となす。時に西紀千二百二十七年（宋理宗寶慶三年）なり。

元太宗の南略

第二章　元太宗の南略　拔都の西征

太祖沒するに臨みて其大領土を諸子に分ち、長子朮赤は既に沒したれば其遺族に阿羅思の南より今の吉利吉思に

至る一帶の地を與へ、次子察合台には回鶻より僞水に至る西遼の故地、三子窩濶台には乃蠻の故地、末子拖雷には蒙古本土を讓り、窩濶台を帝とし拖雷をして輔けしむ。窩濶台は則太宗にして太祖の遺志を繼ぎ、弟拖雷をして漢水を下らしめ自潼關を破り腹背夾擊して汴京を陷る。金の哀宗蔡州（河南省汝寧府）に奔る。太宗使を宋に遣はし約するに河南の地を以てし、宋將孟珙と合して蔡州を陷る。（宋理宗端平元年皇紀千八百九十四年）時に西紀千二百三十四年、金帝を稱すること九世百三十年にして滅ぶ。宋は金に勝つの勢に乘じて中原の恢復を企て、急に起りて蒙古の守兵を逐ひ汴京・洛陽を奪ふ。太宗の子濶端軍を率ゐて直に江淮に逼り四川に入り連に宋の州郡を陷る。宋將孟珙等克く戰ふこと雖も其勢日に蹙りぬ。

金の滅亡

蒙古・宋に迫る

高麗は明宗の晩年より權臣崔忠獻威福を弄び明宗の孫高宗の世に及びて忠獻の子蟲事を用ゐて國政を紊る。時に金室衰頽し遼の遺族畔きて遼東に割據し大遼國を建て高麗を侵す。蒙古の部將哈眞遼東に出で大遼を討滅して高麗を威服せり。已にして高麗蒙古の使者を害せしかば蒙古の將撒里塔京城を陷る。高宗難を江華嶋に避け尋で西紀千二百四十一年表を上りて臣と稱し王子を質として降れり。

大遼・高麗の降服

太宗が東南二方の經略を爲せる間に、花剌子模の札蘭丁はデリーの公主に尙して其兵を借り故地を恢復し西方復擾る。太宗則伐ちて之を破り、遂に大に征西の師五十萬を起し、故朮赤の子拔都を總督となし、其兄斡耳朶・己の子貴由・

拔都の西征

拖雷の子蒙哥・拖雷の孫海都等を將ごし速不台を先鋒となす。速不台進んで亦的勒河を渡り不耳阿耳を陷れ蒙哥は欽察を攻め拔都は北に向ひて烈野贊を屠り莫斯古ノブゴロッドを陷れ更に南に轉じて幾富を燒き阿羅思を蹂躙し終れり。此に於て蒙古は戰勝の餘威に乘じ鋒を轉じ拔都は一軍を率ゐて馬札兒匈牙利に向ひ、一軍は海都を將ごして孛烈兒波蘭土に入る。南軍は先づウラキアを蹂躙し馬札兒の大軍をサヨ河に擊破し、ブダ・ペストを陷れて國王を奔らし、禿納河を氷渡してグラツを屠る。北軍はクラカウを取りシレシアに入り、歐北諸侯王の連合軍をワルスタットに破り、東南に轉じてモラヴィアを侵し、オルミュツを陷る。是より於て歐州全土震撼し揑迷思獨逸以下諸邦の民皆荷擔して遁る。偶、太宗崩じて訃音軍中に達す。拔都乃凱旋の命を諸將に下して東に歸らしめ自南路に留り、東は吉利吉思荒原より西カルパチア山に至る禿納の下流・太和嶺北の地を領し、亦的勒河畔の薩來に都して金黨國を建つ。實に西紀千二百三十六年より仝四十三年に至る間なり。

第三章　元憲宗の南征　旭烈兀の西征

宋の理宗の淳和元年（西紀千二百四十一年）元の太宗崩じ長子貴由・大汗となり定宗といふ。定宗在位三年にして崩じ蒙哥・位に卽く。憲宗是なり。皇弟忽必烈・漠南の軍事を總理し、四川より雲南に入て大理國を伐つ。初唐の玄宗の時・雲南の最南・蒙舍詔に皮邏閣出でて唐の冊封を受け雲南王となる。

大理國の降服

其六世の孫・酋龍に及び國を大理と號し皇帝と稱し交趾より東印度の間を掩有す。其後國勢漸く衰へ是に至りて其王段智興・蒙古に降る。（西紀千二百五十三年）吐蕃は始祖・棄宗弄贊以來深く佛教を信ぜしが、唐の玄宗の天寶年間・北印度の僧巴特瑪撒巴々來りて喇嘛教を揚め、年と共に其勢を加へ、此頃に至りて喇嘛扮底達の威・全吐蕃に遍ねし。忽必烈・大理を降し吐蕃に入り、扮底達と和し速不台の子・兀良哈台をして交趾を伐たしむ。交趾は五代の時・丁部領・瞿越國を建て宋の太祖の封冊を受けて交趾郡王となる。後・太宗の時・黎桓・丁氏に代り、眞宗の世・李公蘊・黎氏に代りて大越國と號し、理宗の時に及び陳照・李氏に代りしが、蒙古の入寇に遭ひて遂に降れり。（西紀千二百五十八年）

交趾降る

憲宗の南征

元の世祖

蒙古の憲宗は已に西南の三國を降し、かば、皇弟阿里不哥を留めて喀喇和林を守らしめ、自・大軍を率ゐて南下し、宋の四川の諸城を取り合州（四川省重慶府）を圍み、弟忽必烈をして江を渡りて鄂州（湖北省武昌府）を圍ましむ。而して兀良哈台も亦交趾より北上して潭州（湖南省長沙府）を侵す。宋は三方に敵を受け、理宗・賈似道に命じて蒙古に當らしむ。似道・鄂州に至り密に使を忽必烈に送り、幣を納め臣と稱して和せんと請ふ。適憲宗・釣魚山に崩ず。阿里不哥・是に於て大汗を喀喇和林に號し、憲宗の諸子・定宗・察合台の子孫等皆之に服す。忽必烈は江北の地と歳幣とを約して似道の請を聽し、開平（内蒙古多倫諾爾の北）に還り大汗を號し、進みて阿里不哥を降し、大都を燕京に奠め國號を立てゝ元といふ是を世祖となす。實に宋度

旭烈兀の西征

宗の咸淳七年にして西紀千二百七十一年に當れり。是より先西方は札蘭丁既に敗死せしも回教徒屢亂を爲して治まらず。蒙憲宗乃皇弟旭烈兀を遣りて之を伐たしむ。旭烈兀天山の北麓より阿母河畔の柯提に至り西方諸侯の兵を併せ、大裏海の南に木乃奚を服し更にクヒスタンを圍みてイスマイル派の教主ロクウヂンを降し、遂に八吉打を陷れ哈利發モスタシムを擒殺す。サラセン教國こゝに全く亡びぬ。時に宋理宗の寶祐六年なり。西紀千二百五十八年モスタシムの一族西の方密昔兒埃及に遁る。旭烈兀は郭侃等をして印度に向はしめ、自大軍を率ゐて西に進みシリアを襲ひアレッポを略し、的迷失吉を陷れ天方亞剌比亞を取り、將にゼルサレムを基督教徒の手に復し、密昔兒の回教徒を殲さんとす。會憲宗の訃音至りしかば師を旋して國に歸り帝位を繼がんとす。然も密昔兒の兵シリアを破るに會し其意を果さず。悉く小亞細亞地方を略定し、タブリズに都を奠め僞水以西に伊兒汗國を建設せり。

第四章　元世祖の一統及東侵

「鄂」に蒙古の軍北に退くや、賈似道は臣と稱し幣を納むるの約を愿し、軍功を貪ふて理宗の寵任を得、頻に威福を弄び

て國難を顧みず。既にして元使至りて前約を迫りしかば似道囚へて還さず。元の世祖大に怒り、先づ襄陽を圍みて呂文煥を降し、伯顏をして文煥と共に東の方臨安を衝かしむ。宋の孝恭帝位に即きて元賈似道を貶竄し、勤王の師を四方に徵す。文天祥・張世傑等所在兵を起して王に勤む。

臨安陷る

而かも臨安既に圍を受けて陳宜中和を唱へ表を草して元に降り、元兵は宋帝及理宗度宗の后を執へて國に送る。宋の諸王群臣逃れて海に浮び、孝恭帝の兄益王昰を福州に立てゝ恢復を圖る。元兵來り伐つ。張世傑等帝を奉じて廣州に奔り、帝崩ぜしかば、陸秀夫等更に皇弟衛王昺を奉じて厓山廣東に遷る。元兵水陸より並び迫り文天祥を生擒す。陸秀夫は帝と共に海に投じて死し、張世傑は安南に遁れんとして溺れ、宋遂に滅ぶ。時に西紀千二百七十九年にして宋は太祖建國より十八帝を更へ三百二十年を經たり。

厓山の敗

元と高麗

高麗は一たび元に降りしも後叛服常なく元の憲宗の末年に至りて復元に降る。高麗の明宗殂落して元宗嗣立せしが權臣の爲ふ廢せらる。元の世祖爲に問罪の師を起し、慈悲嶺以西の地を收めて元宗の位を復し、女を以て元宗の子忠烈王に尙し、之を介して日本を招諭す。我國は唐末に使聘を斷ちし以來、五代を經て宋に及び、僧侶商賈等の私航ありしも、國際上の交通は全く絕えたりしが、此時鎌倉執權

文永弘安の元寇